

満洲日系大学の戦後同窓会に関する  
歴史社会学的考察 (2)

——各同窓会における満洲記憶について——

韓 美 怡

〈目 次〉

序章

第一部 満洲国の高等教育機関とその同窓会 —— 歴史学的概観

第一章 満洲国の高等教育機関政策と高等教育機関

第二章 各教育機関の概要と同窓会の特徴

(以上前号)

第二部 満洲建国大学とその同窓会

第一章 建国大学の概要

第一節 満洲国の建国理論と建国大学の創設

第二節 建国大学の概要

第二章 建国大学とイデオロギー

第一節 建国大学の創立者たちのイデオロギーと建国大学の建学

第二節 建国大学教育者のイデオロギー

第三節 建国大学学生の自己認識 (中国人学生を中心として)

第三章 建国大学における反満抗日運動

第一節 日系高等教育機関における反満抗日運動の展開

第二節 学生読書会と反満抗日運動

第三節 反満抗日運動の影響

#### 第四章 建国大学の崩壊

第一節 作田副総長の辞任——管理層の問題

第二節 建国大学における学生間の軋轢

第三節 回想文集に記録された建国大学の崩壊

#### 第五章 建国大学の同窓会

第一節 同窓会の概況

第二節 建国大学同窓会と国際交流 (以上本号)

### 第三部 理論的考察

第一章 同窓会報における満洲記憶

第二章 日本人同窓生の語りと記憶

第三章 中国人同窓生の語りと記憶

第四章 他の出自の同窓生の語りと記憶

結論

## 第二部 満洲建国大学とその同窓会

### 第一章 建国大学の概要

#### 第一節 満洲国の建国理論と建国大学の創設

満洲国通信社編『満洲国の歴史と精神：少国民読本』（満洲国通信社、1938）は若者向け教育読本で、満洲国の建国の歴史と満洲国の建国精神を紹介している。それによれば、張学良政権下では「苛斂誅求」により、満洲国民の生活が困難であった社会の現状が強調されている。読本によると、関東軍は「満洲事変」を惹き起こし、張学良など軍閥を追放し、満洲人民が平和に暮らし働くために必要な条件を提供したと主張されている。この読本によれば、帝国体制の実施と「大満洲帝国」の樹立には、歴史的な必然性があるという。この歴史資料には、満洲国の設立以後に行われた社会の広範囲にわ

たる若い満洲国民に対するイデオロギー教育と、満洲国設立以前の満洲人民の集合的記憶に対する支配者側の意識が反映されている。

民間団体としての協和会は、満洲建国初期にも建国理論を樹立するにあたって重要な役割を担った。満洲国協和会編『満洲国協和会之概要』（大同2（1933）年）は、協和会の組織形式、最高機関、組織大会、創立宣言及び綱領について紹介していたが、その中に「協和会とは何か」、「協和会結成の遠因」、「協和会結成の近因」、「設立の動機と構成人物」、「協和会の使命と東亜連盟」、「過去1ヶ年間の事業」など詳しい項目も含まれている。とくに強調されたのは、協和会の性格についてである。すなわち協和会は政党ではないということで、ドイツのナチ党、イタリアのファシスト党とは異なり、さらに中国の国民党や共産党とも異なっていることが説明された。この『概要』によれば、協和会とは、満洲の在地エリートによる、さまざまな民族の歴史的現実と産業構造の社会的現状に基づき、古くから各民族によって開発されてきた資源を守り、満洲の社会的安定と経済的発展を保証する「思想建国団体」である。『概要』では、張学良は満洲内部で生じた社会矛盾（宗教団体の林立、社会の混乱、農業の不振、馬賊の横行など）の原因を海外（日本側）に負わせた者と批判されている。一方張学良は民族感情を利用して、南京の蒋介石政権と合流し、満洲地区に「三民主義」を導入した張本人とされた。さらに、排外政策に訴えて満鉄など日本企業の社員の給料を削減し、在留邦人に圧迫をもたらした。

そして、『概要』によると、満洲事変後、満洲国の創立過程において、社会各部門の活動を円滑に進めるために、満系有力者をも含めた上層組織が必要であるとされた。『概要』では協和会の組織について、以下の三つの点が強調された。1、「満洲国協和会」は満洲人民により自発的に結成された「思想建国団体」である。2、「協和会」は政党ではないとする一方で、共産党の「攪乱」、国民党三民主義の「欺瞞」及び資本主義の「重圧」を批判している。3、「協和会」は満蒙在住民の生存欲求を反映し、満洲国を効率的に運営する。他方で協和会は、下層機構を整備するための必要条件も提供している。

満洲国外交部編『満洲国民之総意』（満洲国外交部、1932年）は、満洲国

が独立した原因と事実経過を説明し、満洲国の独立は三千万民衆の総意を表していると主張した。リットン調査団報告書を反駁し、国際連盟にその報告書の錯誤を訂正するよう要請した。そのほか、『総意』には、満洲における様々な民族の在地住民から、満洲国政府について好意的で、張学良については批判的な「意見書」も編集されていた。例えば「旧政権の虐政を痛論し、新政府の恩恵を謳歌する——在満露人移住者代表意見書」、「民族自決の公理を支持し、国際連盟の満洲国支援を希望する——奉天省農工商学各界代表の意見書」、「満洲国民の決心を宣明し、民族自決の自由を主張する——新京総商会代表の意見書」、「人民既往の痛苦を列挙し、建国以後の幸福を称揚する——吉林各県人民代表の意見書」、「リットン報告の謬説を駁し、満洲建国の真実を解釈する——黒龍江省民衆代表の意見書」などである<sup>1)</sup>。

さらに、異なる民族の小学生が出した満洲国に対する『意見書』も収録されていた。例えば、『東省特別区小学生の意見書』の「なぜ満洲国を擁護するか」、「旧軍閥は人民に害」、「王道政治は人民に利」、「各民族は我が国の善政を感謝する」、および『在満朝鮮人小学生の意見書』の「日月重光」、「必死で楽土を擁護する」、「前の痛苦を回想する」などがある<sup>2)</sup>。それらの意見書には、1932年3月1日に『建国宣言』が發布されてから、儒家思想と組み合わせた「王道政治」、「王道楽土」などが如何に民衆の思想に浸透したのかが反映されている。「新学制」が実行される以前、満洲領域では一部地域で国民党体制下の教育制度が行われていたが、関東軍方面が一番警戒していたのは国民党の「党義教育」である「三民主義教育」、さらに共産党により行われたマルクス主義的な教育であったという。従って、中国人が共感する伝統的な儒教思想を利用するのが適当だと考えられた。

1) 「痛論旧政権之虐政、謳歌新政府之恩恵——在満露人移住者代表意見書」、「主張民族自決之公理、希望国連支援満洲国——奉天省農工商学各界代表之意見書」、「宣明満洲国民之決心、主張民族自決之自由——新京総商会代表之意見書」、「歴数人民既往之痛苦、称揚建国以後之幸福——吉林各県人民代表之意見書」、「駁斥李頓報告之荒謬、解釈満洲建国之真相——黒竜江省民衆代表之意見書」

2) 『東省特別区小学生意見書』（「為什麼擁護満洲国那？」）、「旧軍閥与人民之害」、「王道政治对人民之利」、「各民族感謝満足我国善政」、「在満朝鮮人小学生之意見書」（「日月重光」、「誓死擁護楽土」、「回憶从前之痛苦」）。

1937年10月10日に満洲国により『新学制要綱』が發布された。その中では「建国精神及訪日宣詔ノ趣旨ニ基キ、日満一徳一心不可分ノ関係及民族協和ノ精神ヲ体認セシメ東方道徳特ニ忠孝ノ大義ヲ明ニシテ旺盛ナル国民精神ヲ涵養シ徳性ヲ陶冶スル」ことが教育方針として示された。まず1935年、皇帝溥儀が日本訪問より帰国して『回鑿訊民詔書』を發布した。その中で溥儀は「朕、日本天皇陛下ト精神一体ノ如シ」、即ち満洲国の建国精神を儒教色彩が濃厚である「王道」から、天皇統治に適合的な「皇道」に転換させた。宮沢恵理子によれば、「このころ関東軍は満洲国内を軍事的に完全に掌握するために、〔中略〕勃発した抗日東北義勇軍蜂起に対する討伐を繰り返した。関東軍の軍事制圧が次第に完成する傍らで、満洲国政府は建国五周年となる1937年以降を第二期国家建設期とみなし、これを機に組織改革・新学制・第一次産業開発五カ年計画・開拓国策計画などの実施を予定していた」<sup>3)</sup>。

積極的に一連の行動を展開した関東軍は、教育の側面でも、満洲国の国策に見合った様々な計画と政策を行った。建国大学は、新学制に従って設立された。「建国大学令」によると、建学目的は「建国精神の神髓を体得し、学問の蘊奥を究め、身を以て之を實踐し、道義世界建設の先覚的指導者たる人材を養成する」であると表現されている<sup>4)</sup>。換言すれば、「建国大学令」により、建国大学は満洲国の建国精神を体現したのである。最初の石原莞爾等のアジア大学構想とは非常に異なっていたが、建国大学の創設は、満洲国の国家建設と関東軍の戦略目標と緊密に結びついていた。

「建国精神」の「神髓」の体得のため、建国大学では「道義世界の先覚的指導者」を養成するのは必須であった。一方建国大学創設準備と同時期に、協和会が「建国精神」のイデオロギー教育として力を入れていたのは、青年訓練の実施であった。建国大学と協和会の青年訓練は、非常に類似していた。宮沢によれば、「この青年訓練の内容は、建国大学の教育方針と共通点が多く、明らかに両者は同一の思想に基づいて構想されている」<sup>5)</sup>。宮沢は「建

3) 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、風間書房、1998年、12頁。

4) 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史総論』満蒙同胞援護会、1970年、607-609頁。

5) 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、風間書房、1998年、20-21頁。

国大学創設と協和会との関係を直接示す資料は発見されておらず、両者の関係（の実態）については従来不明とされてきた」と述べる一方、「建国大学と青年訓練の共通点を考察することによって、建国大学設立構想は協和会の青年訓練を補完するものであると結論づけることが可能であると思われる」と判断している<sup>6)</sup>。以上に述べた共通点に着目すると、建国大学とは満洲国における国策大学であると考えることが出来る。建国大学は、満洲国の建国精神を体現する必要がある、さらに戦時期の必要に従って思想・精神訓練の内容を調整し、満洲国に貢献しうるエリート官僚の養成機構として構想された。

## 第二節 建国大学の概要

関東軍は中国東北地区で 14 年の支配を行った。その期間、主な日系の高等教育機関では実業を重視し、理科系が中心であったが、一方建国大学は文科系の最高学府であった。小山貞知によれば、その建学目的は以下のようであった。

「吾人は建国大学の創設により〔中略〕二つの大きな問題が解決されたことと思ふ。一つは今次創造的經營的国家の新組織として、行政機構が改革され、協和会が拡大強化されたのであるが、然る上はそれに充当する人物が必要である。建国大学は実にその人材を養成する所である。その二つは日満一徳一心、民族協和、王道楽土、道義世界の実現を理想とする満洲国の新原理が昨年〔1936 年〕9 月 18 日軍司令部指示『満洲帝国協和会の基本精神』により大体見透かしがついたのでこれからはその蘊奥を極めれば良いのである」<sup>7)</sup>。

従って、国策大学として、建国大学の創立段階では、アジアに向け学生を募集する計画であった。しかし、開学以前に日中戦争が始まったため、実際の学生募集は日本全国および中国東北地区、朝鮮半島、台湾でしか行われなかった。従って、学生の出身は日本、中国、朝鮮、台湾、モンゴル、ロシア

---

6) 前掲 21 頁。

7) 小山貞知『満洲評論』第 13 卷第 5 号（1937 年 7 月 31 日）2 頁、時評欄。

などであった。建国大学には、開学から閉学まで8年間、ずっと「共学共塾」を行っていた。

建国大学の教授については、石原莞爾構想では「各地の先覚者・民族革命家を招聘する」予定であった。実際には日本人以外の教授の招聘活動は根本龍太郎<sup>8)</sup>により行われた。1937年に日中戦争が勃発したため、海外から教授を招聘するのは難しくなった。建国大学の教授陣は日本国内の各大学から招聘されたが、外国人教授は中国国民党系学者である鮑明岑と朝鮮学者である崔南善などわずかしかなかった。この二人は、宮沢恵理子の研究では「政策教授」と呼ばれている。すなわち関東軍の政策によって教授になったという意味である。日本人建国大学教職員については、『建国大学同窓名簿』に記録がある。同時代文献としては、1941年度版『建国大学要覧』が存在する<sup>9)</sup>。また『建国大学研究院月報』には教職員の略年譜などが記録されている。『建国大学要覧』に従って建国大学における日本人教職員の状況を見ると、以下のような特徴がある。第一に、学長である作田莊一が京都帝国大学経済学部教授であった関係で、京都帝国大学卒業生・関係者が多い。第二に、東京帝国大学文学部国史学科教授である平泉澄の推薦を受けたものがある。ここから、学科ごとに異なる出自の学閥があったと考えられる<sup>10)</sup>。

最初の構想では、卒業生のため「建国大学研究院」と大学院を設置することが予定された。1938年9月1日には「建国大学研究院令」が公布され、建国大学に属する研究機構として建国大学研究院が設置された。一方大学院は、構想のように順調に進まなかった。第1期生の卒業は1943年6月であり、日本は太平洋戦争の最中にあつた。そのため、日本、朝鮮および台湾の卒業生はその後軍隊に入り、また、半数以上の学生は学徒出陣で学業を中断した。そのゆえ、建国大学で大学院を設置するのは困難となった。

建国大学の学生の志願資格については、以下のように規定されていた。「日本内地人、朝鮮人、台湾人ハ満20歳マデ、満露人ハ満21歳、蒙人ハ23

8) 当時満洲国総務庁事務官。

9) 東洋文庫に所蔵されている。

10) 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、風間書房、1998年、101頁。



歳マデ支障ナシ。但シ無妻ノ者ニ限ル」<sup>11)</sup>。宮沢恵理子は、建国大学の学生募集と入学について詳しく紹介している。「1938年の3年後の1941年には、中学5年卒業者は前期2年に編入することになったが、満洲国内の他民族の学生はその後も前期1年に入学した。また1945年には建国大学は前期2年、後期3年の5年制となり、中学5年卒業者は前期2年に、4年卒業者は前期1年に入学し、前期3年生は後期1年に繰り上げとなった」<sup>12)</sup>。

1941年の『建国大学要覧』には「学生出身地別調」という表が示されているが、その表によると、建国大学当時主な学生は日本人(276名)と中国人(254名)であり、次いで多かった学生は朝鮮人学生(37名)と台湾人学生(12名)である。

## 第二章 建国大学とイデオロギー

### 第一節 建国大学の創業者たちのイデオロギーと建国大学の建学

建国大学の設立は石原莞爾のアジア大学という構想により始まった。『満洲国史・総論』には次のように記されている。「満洲国は建国以来わずかな期間に目覚ましい発展を遂げたが、民族協和を国是とする理想国家永遠の発展を期するためには、さらにその指導原理を確固たらしめ、かつその指導者たるべき人材を満洲国自体で養成する必要がある、さらには広くアジアの復興に奉獻すべき大学として、亜細亜大学設立の議が、1936年関東軍により提出された」<sup>13)</sup>。

石原莞爾の著作を見れば、満洲国の建国は、協和会、東亜連盟、さらに「昭和維新」と密接な関係があることがわかる。1938年建国大学の建学以前、石原莞爾は満洲国に対する「内面指導」の方策をまとめ、満洲国の主導権を協和会に渡すことを唱えていた。石原莞爾は、満洲国で「アジア復興運動」といわゆる東亜連盟の構想の実現を目指した。マーク・ピーティによれば、「アジア民族間の人種的協力の創出であった。〔中略〕満洲国は満洲に住む各

---

11) 「満洲建国大学生徒募集公告」、1937年8月10日。

12) 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、風間書房、1998年、181頁。

13) 満洲国史編纂刊行会編『満洲国史総論』満蒙同胞援護会、1970年、592頁。



種民族のための『民族の楽土』になるはずであった」<sup>14)</sup>。石原のアジア観は、彼の満洲勤務の過程とともに発展してきた。しかしこの石原の構想にもかかわらず、「満洲国指導方針要綱」(1933年8月8日)は、日本と満洲国の間の軍事的・経済的に密接不可分な関係を構築すると主張し、「内面指導」の方針を変えなかった。その結果、石原の思想は、関東軍内部の指導思想とかけ離れて異端的な思想となった<sup>15)</sup>。宮沢恵理子によれば、石原莞爾の「世界最終戦争論」は段階的に構成されており、最初に日本の権益放棄、内面指導廃止の方針の下に理想的協和会が設立され、理想国家である満洲国の建設に至り、日中、日満の親善を求め、次は東亜連盟の結成に進み、しかる後に、準決勝戦争(対ソ、対英戦争)と最終戦争たる対米戦争に至ると要約される<sup>16)</sup>。

1937年3月以降の具体的な建国大学建学運動のなかでは、参加者は、軍人、官僚および学者という3つの類型に分けられる。軍人では関東軍参謀長東條英機、参謀本部作战部長石原莞爾、陸軍省軍務局満洲班長片倉衷、関東軍参謀部第四課員辻政信らが挙げられる。官僚では満洲国国务院総務厅长官星野直树、満洲国国务院総務庁次長神吉正一、協和会中央本部総務部長皆川豊治、総務庁人事処人事処長源田松三、総務庁人事処人事課長木田清、総務庁人事処事務官根本龍太郎など日系官僚が参加したが、国务総理である張景惠など満系官僚も加わった。さらに、学者では、東京帝国大学教授寛克彦、平泉澄、京都帝国大学教授作田莊一、広島文理科大学教授西晋一郎らが挙げられる<sup>17)</sup>。

平泉は有名な「皇国史観論」者である。彼は建国大学の創設について次のように回想している。「大学創設には、誰を中心とするかが問題です。最初には本庄繁大將を総長にするという話が起った。次には牛島〔実常〕中將、それはかなり進みました。それから一時は、小畑敏四郎中將の名前が出た。

14) マーク・R・ピーティ『日米対決』と石原莞爾、たまいらは、1992年、117頁。

15) 前掲118頁。

16) 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、1998年、31頁。

17) 湯治万蔵編『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、7-8頁。

〔中略〕今日の話は、明日はひっくりかえる。明日の話も明後日に変える。それはひどいものでした。〔中略〕相談もやめてもらいましょう。相談しても仕方がない。〔中略〕私は辞めようとした。ところが『やめられては困る、是非相談に乗ってくれ』という話です<sup>18)</sup>。

平泉澄はその他の3名の教授、すなわち笈克彦、作田荘一、西晋一郎を推薦した。彼はその理由について次のように説明した。「東京帝大、京都帝大〔中略〕などと同じ学風で甘んずるとすれば特に建国大学を創設する必要はない。建国大学をつくる以上、日本の学風とは別個のものでなければならぬ。従来の日本の大学は、あまりに欧米の学問のなまかじりに過ぎている。それから離れて、アジアはアジア、特に日本独自の思想、学問というものが建てられて、世界の学問、文化に寄与するものとして新しいものが出てこなければならない。その意味で、仏教哲理を研究し、神ながらの道を研究しておられる笈克彦先生。経済学の面で『道』を考えておられる作田荘一先生。倫理学の上で西洋倫理とは違う東洋倫理を求め深遠な道を説かれる西晋一郎先生。この三人の先生を中心に新しい学風を考えたら良いと思ったわけです」<sup>19)</sup>

平泉とこの3名の学者では、各自の学術的観点は異なっていたものの、建国大学の建学理念と方針についての観点ではほとんど差がなかった。すなわち、彼らは「道德教育」を原則とし、欧米の法理に基づいた「権勢国家観」に反して、アジアの「道德国家観」を主張した。作田荘一の観点は以下のように要約される。『『神の道』や『天の道』を始めとする各種の宗旨道や、哲学一般・史学・文学・武学・国家学・実務学科等を収めた。専門学部としての政治学部は、従来の法学部を改めて政治学科目を多く収め、日本の法学部構成と著しく変わったものとなした。ヨーロッパの大学では、ローマ法やゲルマン法やイギリス法等の伝統を承けて法律系統を特に尊重する。〔中略〕しかし日本の大学がそれを真似て法律万能の教え方をなし、〔中略〕西洋人

---

18) 湯治万蔵編『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、13頁。

19) 前掲 13-14頁。

には『法』と聞けば襟を正すだけの遵法精神が養われているが、東洋人はそうでなく、西洋の法律観念に該当するものは寧ろ道德観念であろう。それは西洋の権勢国家観に対する東洋の道德国家観を強く意識せしめることにもなるのである」<sup>20)</sup>。建国大学創設に関わった学者たちは、自由主義的な学風に不満を持っており、アジア特有の学風を満洲の最高学府である建国大学で発展させようとした。

創設にかかわる学者らは、関東軍により招聘されたが、軍人が建国大学の学長に就任することには明白に反対した。石原莞爾と片倉衷は学者たちの主張を支持した。辻政信は建国大学学長の内定者であった牛島貞夫中将に就任辞退を勧告した。その経過について、三品隆以は次のように回想している。

「牛島（内定）総長辞任の経緯：東京事務所でのことだが、石原さんはよく『兵隊と役人のお古は満洲にはいらない』とっておられた。そこで『建国大学にも兵隊のお古を使うことにはゼツタイ反対』というのが片倉さん始め、我々の考えだった。なぜいけないのかというと、既成大学の先生を排すると言いながら、軍だけは既成高級軍人を推薦するというのは大義名分に反するというのが特に片倉さんの強い意見でした。退役某将軍が初代副総長ということになり、既に満洲にもいって関東軍司令官、参謀長、政府の要路にもあいさつをし、本人も勇み立って帰ってきたということがわかった。『これは大変』ということで、ちょうど上京していた辻に『将軍を引き下がらせるよう説いてこい』ということになった。さすがの辻も『満洲で挨拶までしてきたのをやめてくださいともいえないのじゃないか』というのを『いや、だめた』ということで、とにかく将軍の自宅に行ってもらった。辻もこれは大変な仕事だと言いながらもようやくみこしをあげた。深夜二時間辻はねばった。はじめは『いやしくも退役ながら自分は軍人である。陸軍省に呼び出され、満洲まで行って関東軍にも挨拶して、よろしく願うとまで言われてきているのに、君たち幕僚、下輩がやめるとは筋が通らぬではないか』と言われて辻も参ったらしい。しかし辻は建国大学の広遠な理想を説明し『これは到底軍人

---

20) 前掲 81 頁。

の出るところはない。私たちは事務的にはやっているが、副総長となると閣下には無理だ。』と説得に努め、将軍も不精不精、納得されたいらしい。そこで今度は陸軍省や関東軍からいうわけにかぬので、ご本人が辞退するという形にしてもらって、辻は真夜中になって、汗を拭き拭き帰って来た。『今夜はまったく参った』と、一生に一度のタメイキをもらしたことです<sup>21)</sup>。

1937年7月、東京方面の創設委員は新京に到着した<sup>22)</sup>。7月15日から17日の3日間、新京日本軍人会館の大講堂で「建国大学創設委員会」が開催された。委員長長東條英機、副委員長星野直樹、東京方面の委員は西晋一郎を除いて全員出席した。満洲方面の委員は、張景恵、羅振玉、袁金鎧、稲葉岩吉、宇田一、辻権作等であった<sup>23)</sup>。学校の管轄に関する具体的な件について、寛克彦は神道の観点から、皇帝直轄が必要であると提案したが、星野直樹は政府が管轄しなければならないと主張し、この案に対し反対した。結局、「建国大学令」の第二条では「建国大学ハ国務総理大臣ノ管理ニ属ス」と規定され<sup>24)</sup>、政府管轄に決定した。以上のような議論を踏まえた上で、「建国大学創建綱要」(1937年8月5日)<sup>25)</sup>、「建国大学令」(1937年8月5日)<sup>26)</sup>および「満洲国建国大学生徒募集公告」(1937年8月10日)<sup>27)</sup>という三つの文書が作成された。

## 第二節 建国大学教育者の格式統一

建国大学の学長は、建国大学の教育の責任者として、非常に重要な意味をもつと考えられた。1938年5月2日の開学から、1942年6月作田荘一副総長の辞任まで四年間は建国大学教育の第一段階と認められる。1942年6月、軍事参議官陸軍中將尾高亀蔵は後任の副総長に就任し、1945年8月建国大

---

21) 湯治万蔵編『建国大学年表』、建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、24頁。

22) 前掲40頁。

23) 前掲41頁。

24) 前掲51頁。

25) 前掲52頁。

26) 前掲51頁。

27) 前掲56頁。

学の閉鎖まで厳しい管理政策を行った。その他、教授、塾頭なども建国大学教育の担い手として検討する。

まず、「建国大学令」の第4条から見ると、学校では総長は特任であるが、副総長は「特任若は兼任」、教授は「特任若は薦任」である。第5条では、「総長ハ学務ヲ綜理シ所属職員ヲ統督シ高等官ノ進退ニ関シテハ之ヲ専行ス」とされ、第6条には、副総長は総長の職務を代理する権力を有すると書かれている。第14条によると、建国大学のもとに評議会を置いて、その評議員は教授の中より総長によって指名される。

建国大学の教育の担い手らのうちには、出自によって学術的主張とイデオロギーが異なっている場合もあった。先ず建国大学の教授らの学術的観点の相違から考えてみよう。建国大学の教授陣のうち、前掲のように、京都帝国大学出身の学者は統制経済を主張しており、学生に対しても満洲の建国理念を広く宣教していた。例えば、岡野鑑記は『建国大学研究院月報』で、統制経済について自らの認識を以下のように闡明した。

「満洲計画経済の性格を論ずる前に、計画経済自体の概念規定が先決問題である。計画経済とは、従来自由主義経済組織に対立する所の或る他の新国民経済組織であることには異論がないが、従来資本主義の本質たる私有財産制と営利主義と市場経済とを、如何なる限度において許容するかによって著しく異なるが為である。統制経済とは、従来自由主義的国民経済における営利主義と市場とより発生する諸矛盾を、国家及社会的各機関に依って、個別的に是正せんとする経済活動を言〔う〕」<sup>28)</sup>。彼によると、満洲国の経済は、全体的計画経済より、部分的計画経済である。従って、満洲国の経済について、岡野は「満洲計画経済の主体は、国家機関及其の権限を委任されたる社会的諸機関である。政府の各種の経済行政機関中特に総務庁企画処及企画委員会が、経済参謀本部の中樞機関である。〔中略〕社会各機関としては、多数の特殊会社、商公工会、及他の経済団体としての協会、連合会、連盟組合等々がある。即ち国家と此等の諸機関との法律的統轄関係を点検す

28) 岡野鑑記「満洲計画経済の性格」、『建国大学研究院月報』、創刊号、2頁、康德7年9月15日。

る。〔中略〕満洲計画経済の目的は〔中略〕一定の国家目的に規定されているのである。最高の絶対的目的は、王道楽土の道義的模範国家の建設であるが、現階段における直接目的は国防国家の完成である」<sup>29)</sup>。

副総長作田荘一は、同時に建国大学研究院院長として研究活動を指導していた。彼の思想に関する学術的研究は経済理論と神道論の二つに集中した。彼の経済思想の集大成である『自然経済と意志経済』（1931年）において、彼は、国家に相当するような国際共同団体の創出を主張し、その「意志」によって、国際経済が統制されることを理想とした。そうでなければ、列強の帝国主義支配による弊害を解決できないと述べる<sup>30)</sup>。

建国大学の教育の担い手である教授らも<sup>31)</sup>、創設委員会四博士の学術理念および政治的主張と一致するというわけではなかった。例えば、藤田松二<sup>32)</sup>は、学校当局の主流的思想とは異なり、座学より農事訓練などの重要性を学生に教えた。建国大学の学生はよく藤田に「工場の労働者は機械に追われてでも仕事をするが、百姓は自分の意志で鋤を奮わねばならない労働だ。手を拱いて畠はそのまま、何も出来てこない。同じ体を使ってもスポーツは遊びだが、百姓は遊びでは出来ない。それでいて経済的に報いられることは甚だしく少ない。君たちにはそれを体験してもらうのだ。都会の喫茶店で煙草をふかしながら、『農村問題は……』などと議論する連中の屁理屈など、何の役にも立たない。自分で百姓をして見なければ駄目だ」などと言われた<sup>33)</sup>。

さらに、藤田より過激な発言をする教職員もいた。昭和維新運動に関わっていた農事訓練助手の北原勝男は、藤田の後輩であり、藤田の紹介で建国大学に赴任した。三村文男は回想録に次のように記した。「北原先生は（中略）農業訓練の時間中に『おれたちは反満抗日でないといかん』とか、『協和服

---

29) 前掲と同じ。

30) 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、1998年、141頁。

31) 『満洲年鑑付録——満洲職員録』、1941年、9頁。

32) 藤田松二、京都帝国大学卒業、農学士、農事訓練・塾頭、大分県立玖珠農学校教諭・宮城県農林主事・宮城農学寮長。加藤完治の高弟で、宮城農学寮で石原莞爾と知合い、建国大学に赴任したと言われる。終戦直後に長春で死亡。

33) 三村文男〔1期生〕「建国大学における自由と不自由」、建国大学同窓会（編）『歎喜嶺遙か：建国大学同窓会文集』、1991年、208-209頁。

を着ているヤツらはみんなぶち殺してしまったらいいんだ。ロシア革命のときには、ネクタイをしめているヤツが殺されたんだよ』などといわれるので、びっくりしたことがある」<sup>34)</sup>。

先に述べたように、建国大学では、創立者により推薦された教授がかなりいたが、学閥意識の発生は不可避であった。日本人学生の回想にはそれが示されている。「放課後第一塾では東大法学部教授蠟山政道氏の講演があって、演題は『物心両面よりみたる東亜体制』となっていた」<sup>35)</sup>。彼らは校則違反を承知の上で、週末に蠟山政道の講演を聞きに行った。「形式的な校則違反以上に教官側で問題となったのは、作田副総長が唱えられた『近代の学問の否定』という命題に対して、蠟山氏は『近代の学問』の代表者だったのである。〔中略〕さらに東大対京大の学閥意識がこれに加わり、他の学生に対する影響も心配されたようである」<sup>36)</sup>。

さらに、一部の教授は、多民族からなる建国大学の教室で、自らの学説を教えたが、日本以外の民族の学生にとっては反論すべきイデオロギーとみなされた場合もあった。東洋史の教授丹羽正義<sup>37)</sup>は、明治時代の中国史学者である矢野仁一の弟子であり、中国史に対する観点は中国人学生とは非常に異なっていた。彼は、中国史における「朝貢体制」を批判し、それは中国皇帝により中国を「天朝上国」と見なす誤った認識であると述べた。彼によると、中国史の中に記録されたいわゆる「朝貢」の本質は、夷狄らは幣物を中国皇帝に献上し、代わりに朝廷は彼らに絹などを恩賜することである。換言すれば、これは一種の物々交換ないし互恵的貿易関係だと認識できるという。このような言論は、民族的自尊心が強い中国学生には、かなりの感情的抵抗を与えるものであった<sup>38)</sup>。

34) 前掲 212 頁。

35) 前掲 209-210 頁。

36) 前掲 210 頁。

37) 丹羽正義、京都帝国大学卒業、文学士、東洋史・中国文化、姫路高校教授、神宮皇學館教授。戦後には学芸大学・岐阜大学教授、愛知淑徳大学講師。

38) 閻徳藩〔1期生〕「偽満建国大学人物素描」、長春市政協文史和学习委員会『回憶偽満建国大学—長春文史資料総第 49 輯、1997 年、58 頁。



### 第三節 建国大学学生の自己認識（中国人学生を中心として）

終戦後、一部のかつての建国大学中国人学生は、中国政府に勤め、日中関係の正常化過程で活躍した<sup>39)</sup>。1972年の日中国交回復後、中国人学生も建国大学同窓会会報・会誌に寄稿し、日本側同窓と連絡しながら、しばしば建国大学在学中の経験を述べていた<sup>40)</sup>。一方、戦後中国政府により、1997年に中国長春市政協文史・学習委員会が編纂した『回憶偽滿建国大学』という公式の回想文集が刊行された。そこで、中国人学生は、建国大学教育を受けた卒業生の観点から、自らの建国大学経験を回想している。

その回想文集において、建国大学で教育を受けた中国人学生は、みな同じく満洲国を「偽滿」と呼び、建国大学を「偽滿建国大学」と呼んだ。その呼び方からはすぐに彼らの政治的立場について了解することができる。まず、于家斉<sup>41)</sup>など一期生は、建国大学の教育は「失敗した」<sup>42)</sup>という結論を出した。彼らは、作田副総長の「道義世界」という指導に納得できず、逆にその虚偽性を批判した。彼の回想内容によれば、中国人学生のもとに「読書会」が結成されたのは、中国人学生の民族意識および反日感情を体現したものであった。その後の憲兵隊による反日中国人学生に対する逮捕活動は、事実上は建国大学教育の失敗と「建国大学精神」の破綻を意味していた<sup>43)</sup>。

五期の劉世沢<sup>44)</sup>は建国大学の教学内容及び学生生活を回想した。まず建国大学の授業では、日本語と中国語は満洲国の第一語学とみなされ、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語などは第二語学と称された。モンゴル人学

---

39) 例えば、建国大学出身者である劉徳有は中国貿易代表団の通訳として、日中民間貿易協定の締結過程で活躍した。前掲浜口裕子『満洲国留日学生の日中関係史——満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』、163-166頁。

40) 建国大学同窓会により刊行された『建国大会報』、各期会誌、および記念誌『歎喜嶺』などに彼らの文章を見出すことができる。

41) 于家斉、建国大学1期生、吉林大学教授。

42) 于家斉〔1期生〕「偽滿建国大学及其剖析」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、5-6頁。

43) 建国大学学生逮捕事件について、中国側は主に「反滿抗日運動」、「12・30事件」と呼ぶが、日本側は「思想検挙事件」などと称している。

44) 劉世沢、建国大学5期生、戦後遼寧省社会科学院に務めた。

生の母国語であるモンゴル語、または朝鮮人学生の母国語である朝鮮語は、授業で開設されていなかった。毎年、ソ連に関心を持つ中国人学生が半数ほどいたが、彼らは自らの関心からロシア語を学んだ<sup>45)</sup>。中国人学生らは、建国大学における授業の科目の中では、「精神教育」に対して非常に強く反発していた。劉によると、森信三教授は講義では学生に「満洲国とは日本の皇道思想に基づいて創設された国家である」<sup>46)</sup>とか、「満洲国の設立は大東亜共栄圏の第一歩」とか、または「日本と満洲国は親子の関係である」と教えた<sup>47)</sup>。歴史授業では、建国大学の教授は「満蒙論」を主張し、中国東北地区は満蒙の発祥地であり、中国の一部として認めなかった。これは、中国人学生から見ると、彼らの民族的尊厳を極めて犯すものとだと認識された。

さらに、中国人学生は「八紘一字」と「大和民族優位論」などの理論が入り交じった「民族協和」教育を認めなかった。彼らは、いわゆる「民族協和」の本質は、日本の同化政策に他ならないと認識した。劉によると、建国大学には、他の民族の学生に対する日本人学生の差別が少なくなかった。日本人学生らは、満洲出自の学生、すなわち漢族、モンゴル族、回族を一括して「満系」と呼んだが、公式には「日系」とされた台湾人および朝鮮人に対しては台湾人を「台系」、朝鮮人を「鮮系」と呼んだ。白系露人の場合は、彼らは「露系」と呼ばれた。そのような「系」を民族の後ろに付けて、異なる民族の学生に自分自身の出自を人為的に自己認識させるのは、建国大学の「民族協和」の虚偽性と事実上の民族差別を反映していた<sup>48)</sup>。

7期<sup>49)</sup>の谷学謙は、入学した時は1945年1月であった。彼は、1945年初頭の学校生活について次のように回想した。「1945年1月、私は日本人と一

45) 劉世沢〔5期生〕「偽満建国大学概述」長春市政協文史和学習委員会『回憶偽満建国大学—長春文史資料総第49輯』、1997年、28-41頁。

46) これは劉の言葉。

47) 劉世沢〔5期生〕「偽満建国大学概述」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽満建国大学—長春文史資料総第49輯』、1997年、28-41頁。

48) 前掲と同じ。

49) 建国大学における中国人学生の学期換算方式は、状況によって異なる。谷の場合は、彼は新京第一中学校から入学試験を参加し、合格してから直接に「建国大学前期二年」に入った。

緒に入学した。その時は冬休みであったが、何名かの後期の中国人学生と日本人学生が我々を迎えに来た。日本人学生は比較的に慎ましくて、口数が少なかった。谷らは雰囲気盛り上げるために喋ったり笑ったりした。ある日本人学生は『新聞には載らなかったけど、実際には日本の艦隊は全てミッドウェー島に沈没した。本土作戦が迫っているのは、もう秘密ではない』と言った。一同はこれを聞いて、長い間誰も一言もいわなかった<sup>50)</sup>。谷は、自分が「民族矛盾の中に居た」と述べている。彼によると、表面的に見れば、建国大学には民族差別はあまりなかった。当時満洲国では、日本人と中国人高級官僚だけが白米を食べられたが、一般的な満洲国庶民には雑穀しか提供していなかった。しかし、建国大学では、中国人に提供した雑穀と日本人に提供した白米を混ぜて学生に提供した。このような「共食」は、建国大学の当局から見ると「民族協和」の一つの実践であったが、しかし中国人学生はこれに対しそれほど感銘した訳ではなかった。

谷は、侵略戦争は日本軍国主義者が発動したことだと述べる一方で、日本人学生は中国人と同じく戦争の被害者であると書いた。しかも、彼は次のように建国大学で体験した気持ちを述べていた。「我々はそれなりに反抗することができるが、彼らは一刻たりとも反抗的な意志を表せない。中国人学生と日本人学生は表面上互いに『不可侵』であるが、実際には相互に対立していたのは間違いない<sup>51)</sup>」。

### 第三章 建国大学における反満抗日運動

#### 第一節 日系高等教育機関における反満抗日運動の展開

日系高等教育機関における反満抗日運動は、建国大学一校のみで発生したことでなかった。『建国大学年表』、『新京工業大学校友記事』、田中恒次郎『「満洲」に於ける反満抗日運動の研究』などの史料および関連研究によれば、当時東北地区の多くの機関で反満抗日運動が行われた。教育機構について見

---

50) 谷学謙 [1 期生]「生活在民族矛盾之中」, 長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿 建国大学 — 長春文史資料総第 49 輯』1997 年、268-273 頁。

51) 前掲 271 頁。

れば、満洲国における教育機関の中国人学生、日本から帰国した満洲国の元留学生、さらに満洲国における政界、新聞界などの青年知識人らは、「亡国奴」となることを拒否し、反満抗日運動に身を投じた。

建国大学の中国人学生佟鈞鎧は、反満抗日運動の主要な組織者であり、戦後「趙洪」という変名を使って、自分が参加した反満抗日運動について回想文を書いている。その回想文は、中華書局 1989 年版の日本帝国主義侵華資料集第 8 巻『東北歴次大惨案』および、『回憶偽満建国大学』に収録された。そこで彼は建国大学における反満抗日運動について以下のように記録した。

「1940 年〔中略〕校内から反満抗日運動が始まった。まず『読書会』を組織し、その後東北人民抗日地下組織東北抗戦機構の指導に従う。我々は『建国大学幹事会』を組織した。幹事会は、積極的に日本帝国主義に抗する宣伝活動を展開した。17 名の建国大学中国人学生が幹事会に参加した。1941 年冬、日寇は東北青年に対して大きな虐殺と迫害を行った。1942 年 3 月 2 日の午後、授業中にもかかわらず、日本関東軍司令部特高課の特務らが突然に偽建大を包囲し、新田〔伸二〕の指揮に従って、学校塾務科とともに、柴純然等の 13 人を逮捕した。彼らは別々に長春関東軍憲兵司令部に送られた。こののち、吉林、海龍両市でも建国大学の学生 2 人が逮捕された。今回の逮捕行動の 3 ヶ月前には、建国大学の校内で孫松齡<sup>52)</sup> という学生を逮捕した。1 ヶ月前には、瀋陽建国大学学生である楊増志を逮捕した。1942 年 3 月、建国大学学生と同時に逮捕された者は、長春法政大学の慕長江、張文韜、さらに留日帰国学生であった王宏文と張輔三であった<sup>53)</sup>。王宏文と張輔三は、国民党系東北抗日地下組織東北抗戦機構の幹部であった。彼らは京都帝国大学と東京農業大学の卒業生であった<sup>54)</sup>。

以上に述べたように、東北地区の日系大学における反満抗日運動は、国民党系の活動と共産党系（延安系）の活動があり、従って、異なる集団の語り

52) 長春市政協文史和学习委員会『回憶偽満建国大学—長春文史資料総第 49 輯』1997 年、154-155 頁。

53) 前掲と同じ。

54) 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、38 頁。

も異なっていた。大部分の中国同窓は回想文のなかで、自分の属した運動は中国共産党が指揮した地下工作の一部であると述べている。彼らはその運動を通じて民族意識を自覚したが、さらに進んでマルクス主義の優位性と中国革命の必然性を確信したと回想文の形で語っている。また、前述のように、反満抗日運動には中国国民党系の影響も及んでいた。さらに、戦後に国民党に入党したため、中華人民共和国成立後に政治的に圧迫された元建国大学生もいた。

中国側で出版された他の日系高等教育機関の同窓会回想文集でも、その時期の「読書会」と「反満抗日運動」が在学時期の重要な出来事として語られていた。その部分の内容については、第三部で詳細に考察することとしたいが、ここでは「新京工業大学中国校友記事」のなかに記述された読書会の歴史的な意義について引用しておく。「彼等は友人の心の奥底に潜むものを以前から知っていて、あちらこちらに自発的に読書会を組織し、民族としての気骨の保持と、民族の決意を呼び覚ますため、進歩的な著書を広めて、反満抗日運動を進めていった。読書会は、傀儡政権満洲国が統治する東北の暗黒の夜空に、あたかも散りばめられて煌く星々のような存在であった」<sup>55)</sup>。

## 第二節 学生読書会と反満抗日運動

建国大学における反満抗日運動は、『建国大学年表』（以下『年表』）によると、1940年11月中旬に起きた。日本の建国大学戦後同窓会の私家版史料『年表』、宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、中国側卒業生回想文集『回憶偽満建国大学』などを参考にして、建国大学の反満抗日運動の経緯を整理しておく。

まず、『回憶偽満建国大学』に収録した回想文の著者、たとえば高克（「偽の満洲国建国大学における反満抗日運動とその発展」）、佟鈞鎧（「偽の満洲建国大学における私の抗日闘争」）、田夫（「建国大学における読書活動とそ

---

55) 「偽満建国大学反満抗日運動及其発展」、「我在偽満建国大学的抗日闘争」、「回憶建国大学的読書活動及其它」、「禁書何処来」、「興中会——読書会事件記実」

の他に関する回想)、馬鎮山(「禁書は何処から来たか」、張鳳祥(「興中会——読書会事件に関する記録」)<sup>56)</sup>らは、読書会の参加者・組織者として、自ら経験した反満抗日運動を記述した。

建国大学2期生であった佟鈞鎧は、戦後「趙洪」と変名した。彼によれば、1939年建国大学に入学してから、前期3年(1939—1941年)の学習過程で、彼ら中国人学生は多くの「進歩書籍」<sup>57)</sup>を読んできた。その書籍は、一部は建国大学図書館から盗んだものであったが、一部は新京の吉野町(今の長江路)の古本屋で購入したものであった。それ以外に塾頭<sup>58)</sup>から借りた本もあった。さらに多くの書籍は東京にある内山書店から郵便で購入したものであった。趙によれば、その本は文庫本であり、携帯に便利であった。そうした書籍は彼の民族意識の覚醒を促した。進歩的な書籍を読みながら、彼は2期生であった王用中などと交流し、その過程で民族意識と抗日思想を育んだ。1940年4月のある日、1期生の柴純然は趙洪と会って、自分が校外地下抗日人員と連絡を取り合ったが、彼らの面談を仲介できると伝えた。「その後、5月中旬のある日曜日、柴純然は建国大学付近の南湖公園に行き、その地下組織の人員と会ったと通知した。〔中略〕向こうは張輔三といい、年齢は約24、25歳と見える。彼は、我々に関内抗戦の状況および東北地区で地下反満抗日活動を行う重要性を知らせた。我らも建国大学校内の状況を彼に教え、その後互いにもっと密接な連絡が欲しいと言った。その時は、張輔三はどんな背景である人なのか全然知らず、ただ柴の紹介に従って、その人を信じていた。その後、何回の接触を経て、彼の公式的職業は協和会中央本部青少年部の職員であると認識した。張は実際に、東北地下国民党が指揮した『東北抗戦機構』の新京地域の幹部であった。彼は、新京における高等教育機関で地下抗日運動の発動と宣伝に従事していた」<sup>59)</sup>。

56) いわゆる「進歩書籍」とは、マルクスやレーニンの著作など、満洲国の『理念』からみてふさわしくないと考えられる書籍。

57) 趙洪によれば、山内一男と井辺房夫はたくさんの中国語蔵書を持っていた。

58) 長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、127-128頁。

59) 前掲と同じ。

その後、1940年6月から7月の間、建国大学読書会の会員は頻繁に張輔三の家に行き、建国大学校内の状況を報告した。張は、建国大学学生中の読書会会員に図書借覧と個別談話を通じて抗日思想を宣伝し、組織を拡大することを目指していた。当時、1期と2期の中国人学生は読書会組織の主な働きかけの対象であった。1940年秋、趙洪らは、張輔三の発議に応じて、建国大学校内にその「東北抗戦機構」に属する「建国大学同志会」を設立した。その後、「建国大学同志会」の拡大とともに、1940年末から1941年初には、「建国大学同志会」を「建国大学前期同志会」と「建国大学後期同志会」の二つに分けた。その二つの組織は別々で動いたが、定期的に張輔三と連絡した。その後、一連の組織変動に伴って、前後期の「同志会」は1941年9月頃に解散し、代わりに学生らは「建国大学幹事会」を結成した。その時には、楊増志、柴純然、陳学博が幹事に任ぜられ、楊はその中で総幹事を務めた。幹事会の下には三つのグループを設置した。趙洪の仕事は、3期生の二人の学生と一緒に3期生の中に宣伝活動を行うことであった<sup>60)</sup>。

1941年10月、建国大学幹事会は秘密刊行物『前哨』を出版する計画を立て、その仕事を趙洪と陳東旭に任せた。『前哨』は1941年10月から11月まで、建国大学幹事会会員の寄稿・取材の形で、1期・2期が出版された。最初、『前哨』は幹事会会員の間に流通したが、11月建国大学1期生である孫松齡がチチハルで逮捕されたため、幹事会は2期の雑誌を全部焼くと決定した。その後、太平洋戦争の勃発と共に、建国大学当局は中国学生に対する監視活動を強めた。このため建国大学幹事会の活動は停滞した<sup>61)</sup>。翌1942年の2月上旬、趙洪は柴純然から、楊増志が冬休みを利用して「東北抗戦機構」の「張という奉天の某大学の学生」と会いに奉天に行った時、日本憲兵により逮捕されたことを聞いた。1942年3月2日午前、建国大学塾務科の新田

---

60) 長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、前掲129-130頁。

61) 新田伸二は当時建国大学学生塾の塾頭。陸軍士官学校本科病気退学後、小学校教員を務める。辻政信と名古屋幼年学校で同期生。辻の推薦で1939年建国大学赴任。1949年シベリアにて病死(宮沢、資料参考)。



仲二<sup>62)</sup>は、数名の憲兵を率いて、中国学生趙洪、王用中、陳東旭、閻鳳文、閻樹臣を逮捕した。同日、1期生の柴純然、李樹中、3期生の董国良、喬国玉らが逮捕された。他の同窓であった赫崇義、馬維良も海竜県と吉林市で逮捕された。崔万賢と陳学博は一斉逮捕が行われる前すでに関内に逃げたため、逮捕を免れた<sup>63)</sup>。

趙洪等は新京にある「日本憲兵隊本部」の拘留所に拘留され、1ヶ月後、新京監獄に移送された。1943年4月、新京高等法院では「12・30」事件のうち、建国大学学生の反満抗日に対して判決を下した。趙洪の回想によると、「楊増志、柴純然は無期懲役の判決であり、趙洪は懲役15年、李樹中、陳東旭は懲役13年、胡毓崢は懲役10年、閻鳳文は8年、那庚長、閻樹臣、董国良、喬国玉は各懲役5年の判決であった。王用中は入獄ののち、先に精神病に罹って、その後も日本人看守による太刀で傷つけられ、刃傷で敗血症に罹って獄中で亡くなった。柴も1944年に獄中で病死した。他の人は1945年『8・15』の後に獄中に出獄した」<sup>64)</sup>。

『建国大学年表』には、それ以前に起こった1941年11月14日の学生逮捕事件についての記録がある。「十一・十四（金）反満抗日の政治犯容疑にて、満人系学生十八名、憲兵隊にトラックにて連行される。国民党の方面から誘惑の手が伸び、同族学生の間にも知られないような連絡があつて、ついに反満抗日の陰謀犯として学園から拉し去られた。この件につき作田副総長辞意表明」<sup>65)</sup>。学生逮捕事件については、『年表』が作田莊一副総長の発言を記している。「満洲の治安当局に政治意識強く、長期に亘る教育眼の足らなかった故と思われる」<sup>66)</sup>。一方三品等は、反満抗日運動の発生は、逆に建国大学の自由な学風を反映した事件であると考えた。そのような運動は建国大学の

62) 長春市政協文史和学習委員会『回憶偽満建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、130頁。

63) 前掲131頁。

64) 作田莊一の生前の証言。湯治万蔵編『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、319頁に引用。

65) 湯治万蔵編『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、320頁。

66) 「夏頃」ということは、建国大学反満抗日政治犯が逮捕された11月より半年前のことと考えられる。

創設趣旨に良く合ったものと認識した。「昭和 16 年の夏頃だったと記憶するのですが、大本営参謀だった辻が上海に立ち寄った時のこと<sup>67)</sup>。〔中略〕たまたま、その時、私が作田先生からお手紙をいただいて『自分としては相すまない、大学内に不祥事があり、使命達成が困難になった。せつかくの皆さんのご期待に沿うことができなく、すまなく思っている』。という趣旨のことだった。上海の旅館の一室で辻にこのことを話すと辻は『これは国民党組織の事件じゃないか』という。先生のお手紙で私もそう思っているが、私は辻に『大学の学生がそこまで行ったことは大変なことだ、これで建国大学も真物になった』という、辻は『そうだ、作田先生が責任をとるところか、先生は誇りとされるべきだ、建国大学万歳だ』といました。『先生に、祝電を打って二人で祝杯をあげよう』ということになった<sup>68)</sup>。

学校側の教職員も中国人学生の反満抗日運動をきっかけとして反省を迫られることとなった。森信三<sup>69)</sup>は回想で次のように述べている。「学生思想事件：突如として満洲系の学生の中に思想事件が勃発して、20 名前後の学生が、突然検察当局によって逮捕監禁せられという事件が勃発したのである。これは、建国大学の創設らいり始めての事件だっただけに、その衝撃も甚大だったわけである。〔中略〕その根は学外にあり、さらには遠く延安に根ざしていたものであって、彼らのうちの数名は、既に満洲国境を脱して、遠く延安へ脱出していた者もあったわけである。それ故この問題は、ひとり建国大学内部の大事件というだけではなくなったのである<sup>70)</sup>。

台湾人学生李水清は、12・30 事件は建国大学の管理問題を反映しているものと捉えた。彼は、次のように述べている。「この事件が発生してから、全校に暗雲が立ち込め、皆が悶々の情に陥り、学生は沈黙に沈んでしまった。〔中略〕私は同室の学生に向かって言った。『この事件は彼ら個人の問題では

67) 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』、1998 年、

68) 森信三、1896 年生まれ、京都帝大卒、文学士、塾教育・精神講話・哲学概論担当。天王寺師範学校教授、西晋一郎の弟子、国民精神文化研究所員。戦後神戸海星女子学院大学教授。宮沢恵理子『建国大学と民族協和』資料引用。

69) 湯治万蔵編『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981 年、323 頁。

70) 李水清〔1 期生〕(高沢謙三訳)『東北八年回顧録』建国大学同窓会、2007 年、36 頁。

なく、我々が共同して負わねばならない問題である』と。同室の二名の日系学生も私の意見に賛同した。〔中略〕しかしながら、我々の背後で中日二大民族の交戦は激化し、平和の望みも無い。この状況で民族協和の空談を重ねても如何ともしがたい<sup>71)</sup>。李は、立場を変えて考えれば、中国人学生の心中の苦悶がよくできると語っている。「民族協和は、必ず先ず、民族自覚を自分の中に認識し、他民族と相互の立場を替えて考慮することであり、初めて共通の認識を獲得して、真正な民族協和に到達できるのである」<sup>72)</sup>。彼によれば、12・30事件の影響は次のようであった。「一二三〇事件発生後、〔中略〕日本の同級生も遭難学生に非常に同情的であり、彼らの苦衷を明瞭に理解していた。一二三〇事件は建国大学創立の理想を押し潰してしまったが、同窓学生の友誼は返って深まった」<sup>73)</sup>。

朝鮮人学生である金泳祿は、逮捕事件について次のように回想した。「1941年11月14日、この日は建国大学の決定的な日となった。前期3年生の時だ。学生全員が講堂に集合させられた。やや時が過ぎて、新田塾頭が緊張した顔で入ってきた。1人、2人、と名を呼ばれた者が外に出て行った。訳はわからなかったが、妙な緊迫感があった。長い時間にたくさんの名が呼ばれた。〔中略〕名を呼ばれた学生たちは皆満系だった。王用中もその中に含まれていた。八路軍の組織のメンバーだったとも言出し、国民党だったとも言われた」<sup>74)</sup>。朝鮮人学生金泳祿は、中国人学生に関して一番印象的であったのは、彼らの沈黙であったと回想している。金によれば、王用中が獄中死したことを聞いた中国人学生は、全員沈黙していたという。金の回想は、朝鮮系の学生の視角から建国大学の中国人学生の態度を描いている。

建国大学における「反満抗日運動」の政治色と政治的性格についてもその後確認しておこう。反満抗日運動に参加した一部の学生、例えば国民党側の影響を受けた楊増志などは、戦後中国で政治的には非常に冷遇された。一方、

71) 前掲37頁。

72) 前掲と同じ。

73) 金泳祿〔2期生〕「螻蛄の夢」、建国大学在韓同窓会編『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、16頁。

74) 原文のママ。

趙洪のような学生らは、戦後中国政府のメンバーとなり、日中交流の舞台で活躍することになる。

### 第三節 反満抗日運動の影響

#### 第一項 建国大学の管理層の変化

建国大学の管理職では、学生の反満抗日運動（1941年12月30日）およびそれに続く二波の一斉逮捕（1942年3月2日）の後、極めて大きな人事異動が行われた。なかでも一番大きな変化は、作田荘一副総長の引責辞任であった。阿蘇谷博の回想によれば、多くの学生・職員らは1942年5月31日ごろ、作田の辞職の噂を聞いた。その後1942年6月6日、「重慶派学生検挙事件」<sup>75)</sup>を理由とする作田の「引責辞職」が発表された<sup>76)</sup>。

内海庫一郎<sup>77)</sup>は、作田副総長の辞任の原因について次のように回想している。「建国大学3期生の機関誌によると、〔中略〕思想問題で建国大学生が大量検挙された事件が、その直接のきっかけだったという。しかし当時の私は、学内で日ごろから作田先生の悪口をかげで言っていた連中の間にささやかれていた「作田使いこみ」説に傾いていた。薩摩出身の新城某というひどく無軌道な会計係長がいて、乱脈きわまる経理をやっていたのだが、表向き分任出納官吏は作田先生名義になっていたので、たぶん、金銭のことには疎い先生が、その責任を被らせられる羽目になったのだらうと考えていたからである」<sup>78)</sup>。

作田荘一副総長は1942年6月13日に最後の講話を行った。谷口勉と阿蘇谷博の回想によれば、数多くの第1・2期学生は沈黙しながら泣いた<sup>79)</sup>。作田

---

75) 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、352頁。

76) 内海庫一郎、1912年生まれ、京都帝大卒、経済学士、統計学、京都帝大経済学部副手、1938年建国大学助手。1939年助教授。1940年から国務院総務庁統計処事務官と兼職。戦後北海道大学・武蔵大学教授、宮沢恵理子『建国大学と民族協和』298頁。

77) 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、352頁。

78) 湯治万蔵編、『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、358頁。

莊一副総長の退官について『建国大学年表』は以下のように学内の教職員の反響を記録している。「かくしてその任でない私が、教務科長をしている間に、後で考えれば、私などの知らない領域で、徐々に作田先生に対する政治的なものが、動き出していたかと思われるのである。そして〔中略〕先生のご引退が発表せられることになったのである。学内の教職員は、かねてそうした動きがあるらしい噂は耳にしている、当時の満洲では、何時も何かの噂は行われていたことで、差までも考えていなかったのであるが、それがついに事実となってみると、全学は愕然として驚き、建学いらい嘗つてない悲愁の雲に閉されたのである。それはいわば、慈父に死なれた人々の悲しみともいべきものであった。そして今さらのように、先生の人間的な温情と、その深い学殖に対して、敬慕の念を新たにしたのである。〔中略〕そこで私共は、せめて盛大な送別の催しをしたいと考えたのであるが、先生は断乎としてそれを却けられてお訣れママの式らしいものもあったかどうか、定かな記憶もないほどである。〔中略〕作田先生としては、自分は今副総長としての地位は去るが、しかし建国大学の教官としては、引き続き内地から出かけてきて、学生たちに講義はすること故、何もことさらしい決別式だの、花々しい送別の宴などは、して欲しくないとお考えだったようである。私なども最初のうちは、そうした先生の深いお心を解しかねていたのであるが、しだいにそれが解ってくると共に、なるべく先生のご意志に添うように、考えるようになったのである」<sup>80)</sup>。

3日後、1942年6月16日に陸軍中将尾高亀蔵が建国大学の副総長に任ぜられた。尾高副総長の就任式訓詞は以下の如くであった。「第一、予は建国大学生なりとの強烈なる自覚を持て。第二、慈愛親切になれ。第三、規律を尚び勇氣と実行力とを養へ」<sup>81)</sup>。

79) 森信三「作田先生の御退官」、湯治万蔵編『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、360頁。

80) 「尾高副総長就任式訓詞」、湯治万蔵編『建国大学年表』 建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、359頁。

81) 真覚正慶、東京帝大卒(1932年)、1943年植村敏夫助教授の後任として満炭から転任、建国大学講師となる。ドイツ語担当。後に助教授となる。戦後千葉大学、城西大学教授。

『建国大学年表』によれば、真覚正慶<sup>82)</sup>は、この新任副総長に対して次のように述べている。「昭和 17 年の春は、初代の作田副総長が去ったあとへ、張鼓峰事件の将軍が二代目として押し込んできた。関東軍の秦参謀長が勝手に決めた天下り人事で、軍人専制の満洲でのこと、どうにもならない。正に建国大学の危機であった。就任の訓示を聞いてやっぱりと一同顔を見合せた」<sup>83)</sup>。

また、森信三は次のように述べている。「建学の慈父たる作田莊一先生を、心ならずもお送りした後へ赴任したのは、尾高亀蔵という予備の陸軍中将だったのである。この人は、例の張鼓峰事件を引き起こした当の責任者であって、その責めを引いて、現役から去らざるを得なくなったとのことである。しかも陸軍部内でも『赤鬼』という異名で通っていて、非常に痲痺が強くて、何を仕出かすかしないというので、この人が膝許の東京にいることを、最も忌み憚った東條英機が、満洲の地へ追っ払おうとしたところが作田先生のご引退が、例の学生の思想事件のために、ご予約よりも半年早められた真因のようである。つまりご本人としては、当然大将まで昇進すると思っていたのが、張鼓峰事件で詰め腹を切らされて、憤懣おく処を知らなかったもので、東條英機が忌避しての人事だったとのことである」<sup>84)</sup>。

『年表』に収録されたこの二つの文章によれば、建国大学の教職員は、作田副総長の辞任を明らかに遺憾に感じていた。さらに、建国大学は学者である作田副総長の就任により大学としての実質を認められた経緯があったので、建国大学の教職員は軍人後継者に対して非常に不満を懐いた。さきに見た森信三は次のようにその気持ちを述べている。「どうも東條英機という人は、こうした処ともゆきがあったらしく、例えば山下奉文大将が、常に第一線に廻さ

---

宮沢恵理子『建国大学と民族協和』304 頁。

82) 真覚正慶の回想、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981 年、359 頁。

83) 森信三「作田先生の御退官」湯治万蔵編、『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981 年、360-361 頁。

84) 森信三「作田先生の御退官」湯治万蔵編、『建国大学年表』、建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981 年、361 頁。

れたのも、その為だと国民の一部は噂し合っていたのである。しかし、そのために非常な迷惑を蒙ったのは、建国大学自体であって、その結果がいかなるものであったかは、私もここにその詳細を記すに忍びないものがある。そしてそれは、ひとり尾高予備陸軍中將のためというよりも、建国大学そのものの名誉のためである。だが、全然書かぬというわけにもゆくまいと思うのは、それでは尾高副総長の在任期間は、完全に空白にする他ないからである」<sup>85)</sup>。

軍人副総長は建国大学に消極的な影響を及ぼしたのであった。

## 第二項 中国学生の反日活動と延安への期待

『回憶偽滿建国大学』には、馬鎮山の「対敵闘争の片断」という回想文が掲載されている。そのなかの「1942年以降の読書活動」の部分によれば、1942年3月2日の逮捕事件は「12・30」運動の一部として認識されていた。その後、1942年8月から、建国大学で「第二次読書会」と言われる反日書籍の回覧活動が再び始められた<sup>86)</sup>。その「第二次読書会」における組織状況と政治傾向は1942年3月2日の逮捕事件前の活動とは異なっていた。「第二次読書会」の組織者は馬鎮山、賁長銘、戴励明<sup>87)</sup>であり、三人は読書会活動を続けることを決めた。その過程で、考慮すべき幾つかの問題に対しても検討が加えられた。

「1、まず、今の普遍的な悲観的な気持ちを克服する必要がある。日本は今太平洋戦争の最中であるが、英米と両方の敵となったから、汪精衛が日本に降伏すると悲劇的な最後を迎えるはずだ。2、各期中堅学生に連絡し、対敵闘争を全校的規模で広げる必要があるが、第5期の学生に重点を置く。3、必ず個別に連絡する形で行う。先ず同窓に友人として連絡し、民族思想を啓

85) 「進歩書籍」とは『回憶偽滿建国大学』の中で中国人同窓生の政治立場によって判断されたことであり、中国の社会主義国家としての政治環境に依拠している。回想録の原文を読めば、満洲国の建国精神とイデオロギーに反する書籍であると判断できる。

86) 建国大学2期生。戦後田夫と変名した。

87) 傅昭〔4期生〕「対敵闘争的片段」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学—長春文史資料総第49輯』、1997年、145-146頁。



発し、その後彼らに反日書籍を配って、その過程で中心的な学生を発見し、彼らに依頼し活動を広める。4、何の組織も設立せず、組織の名前も作らず、校外との連絡もしないほうがいい<sup>88)</sup>。

1942年冬休みの前、戴、賁、馬の三人は再び会議を開いた。その主要内容は第6期の学生に対する宣伝活動の方法である。会議で検討された主要問題は以下のものである。

「1、新入生が入学する前に工作を展開するほうが良い」。彼らは冬休みの時、他の在学生のネットワークを動員して、入学する学生との連絡を取り、彼らに学校の状況を紹介する機会に民族精神について啓発的な活動を行った。「2、日本人同級生が来る前に、中国人新入生との十分な交流が必要である。その時は各塾の中心となる学生を見つけ、彼らと連絡を取って、その後の活動の展開に役立てる」。「3、新入生にどのような書籍を回覧するのが適当であるのかを決める。基本的には民族思想を啓発する書籍は良いが<sup>89)</sup>、信頼できる人には『中国近代史』、『中国通史』、『大衆哲学』などもっといい書籍を回覧する」<sup>90)</sup>。

1943年第6期の新入生が入学してから、上に述べたように、馬鎮山らが建国大学中国人学生の中から中心的に働きかけるべき学生を選んだ。一方、戴らは続けて第4期、第5期学生の中で活動した。その際、活動方式は形式上には比較的隠蔽された形で行われており、読書会の成員らは、マルクス主義のほかに、中国共産党に対する理解をもますます深めた。特に1943年後半、読書会は、毛沢東の『新民主主義論』のパンフレットを手に入れた。その際、『新民主主義論』を読んで中国共産党に対する希望が生じ、延安へ脱出すると決めた者もいた。しかし、当時の建国大学の学生は、共産党方面と連絡する手段をもたなかった。彼等は関内に移って対日闘争を行いたかった

---

88) その書籍とは中国の左翼作家の小説、ソ連の小説、および日本語へ翻訳された『三民主義』などである。

89) 傅昭〔4期生〕「対敵闘争的片段」、長春市政協文史和学习委員会『回憶偽滿建國大學——長春文史資料総第49輯』、1997年、145-146頁。

90) 前掲148頁。

が、実際には行けず、そのまま建国大学に在学し、読書会の方式で学校当局と闘った<sup>91)</sup>。

1944年6月、「第二次読書会」の主要組織者である戴励明、賁長銘、馬鎮山、高世俊などは卒業後に学校を離れなければならなかった。彼らは卒業前に、小説か理論書かを問わず、回覧できる反日書籍を全て学校に残した。そして、後継者に様々な具体的内容を引き継いだ。「第二次読書会」に参加した建国大学生は、8月15日以降、「東北青年連盟」を結成し、中国共産党と連絡を取ることができた。1945年10月1日に中国共産党の指導により彼等は「新青年同盟」を結成し、中国革命への道を歩み始めた<sup>92)</sup>。

一方、1941年に入学した第4期学生は、逮捕事件以降、「読書会」の主力メンバーとなっていた。一部の学生は、積極的に読書活動に参加した後、建国大学から出て重慶ないし延安へと向かった。4期生の丁漢章<sup>93)</sup>は、回想文でその学生らの思想と経緯を述べている。「中国学生は団結していた。我らは反日書籍の回覧をしながら、中国人上級生との談話もつねに行っていた。反日書籍は我々の反滿抗日の熱情を奮い起こし、敵と闘う決心を強めた」<sup>94)</sup>。

丁漢章は、馬維良、傅昭、胡毓崢らと協議した。さらに彼も、上級生として、5期の学生と話し合った。こうして別々に話し合う形で、中国人学生は建国大学における思想教育を批判し、互いに連絡をとった。これが逮捕事件後の建国大学における中国人学生の反日活動の実状である<sup>95)</sup>。その後、丁の祖父、父、叔父2名の家族4名は、ある阿片館の盗難事件で逮捕された。丁の父はその時体調を壊し、獄死した。丁は次のように自分の悲憤を表現している。「国の恨みをはらさずに父の仇を討たなければならない。復讐の念に燃えた」<sup>96)</sup>。

91) 傅昭〔4期生〕「対敵闘争的片段」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、145-146頁。

92) 丁漢章、建国大学四期生、退職前大連水産学院教務長として勤めた。

93) 丁漢章〔4期生〕「国難家仇出走客 黎明風雪遠婦人」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、203頁。

94) 前掲と同じ。

95) 前掲と同じ。

丁によれば、1943 年夏には、4 期の学生は自発的に「抗日救国団」という秘密組織を結成した。そのなかには、組織班、宣伝班、情報班、破壊班、暗殺班などがあった。組織の総責任者は聂長林であった。「救国団」は、刊行物『拓荒』も出版したが、寄稿論文には主に理論研究、戦争に対する考え方、国内外の時局に対する分析などがあったという。当時彼らは『拓荒』を床の隙に隠し、学生用荷物室で秘密集会を行った。日本人学生が入ると、中国人学生はタバコを吸うふりをした<sup>97)</sup>。

他の中国人学生と異なり、丁らは、日本敗戦前、個人的連絡を通じて関内へ脱走した。丁は次のように回想している。「私の中国人同窓趙作藩は法政大学<sup>98)</sup>で勉強していたが、彼は 1943 年関内に行く前に、彼の同窓である郭燕生を通じて、情報を私に伝えた。私は、関内に行ったら北平の灯心胡同で北大学生である陳人明を探して、その後新郷に行って、趙主任を探して欲しいと伝えた」<sup>99)</sup>。この内容から見れば、北平で学生地下組織が活動していた様子を確認できる。丁によれば、他のルートもあったという。「白振鐸が探したルートは北京大学教授丁福之を經由して冀南解放区へ向かうルートであった」<sup>100)</sup>。

丁は重慶で疎開中の東北大学<sup>101)</sup>の経済学部 2 年に編入された。そこで、彼は学生運動に参加した。その際、疎開中の東北大学の学生も「読書会」、「民主青年社」、「東北問題研究社」などを組織した。その組織社の幹部たちは、中国共産党南方局青年組の劉光に直接的指導された。青年組は彼らに共産党系の刊行文献と書籍を郵送し、さらに共産党方面の思想教育も行った。

---

96) 丁漢章 [4 期生]「国難家仇出走客 黎明風雪遠婦人」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学——長春文史資料総第 49 輯』、1997 年、204 頁。

97) 当時の新京法政大学。

98) 丁漢章 [4 期生]「国難家仇出走客 黎明風雪遠婦人」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学——長春文史資料総第 49 輯』、1997 年、206 頁。

99) 前掲と同じ。

100) 1936 年西安事変後、国立東北大学と改称され、1938 年 3 月に四川省三台県に疎開された。

101) その刊行物は東北救亡総会により刊行された。『反攻』では主に東北光復に関する文章を刊行していた。さらに蒋介石の不抵抗政策などに対して批判するエッセイも刊行されていた。

重慶での人生について、丁は次のように回想している。「読書会の学習と討論により、我らは抗日が長期の戦争になることを覚悟した。我らはよく共産党系の『新華日報』や毛沢東の著作を密かに読んで、一緒に時局を分析しながら、校内の重大的な事件について討論した。1945年春には、我らは李先念が指導していた湖北解放区に行った。私が重慶に着いたら、白振鐸と聂長林は〔私を〕高崇民に紹介した。高は東北救亡会の総会の責任者であるが、その組織は共産党の指導を受け、東北人向けの政治団体であった。組織の任務は蒋介石の独裁統治に反対し、国民党の積極的な抗日行動を要求することであった。高は私をある印刷工場に派遣して、雑誌『反攻』<sup>102)</sup>の印刷と発行に責任をもたせた」<sup>103)</sup>。

#### 第四章 建国大学の崩壊

##### 第一節 作田副総長の辞任——管理層の問題

いわゆる「反満抗日運動」は、客観的には建国大学の価値体系に重大な影響を与えるとともに、満洲国の建国理念が危機をはらんでいることを明らかに示していた。逮捕された建国大学中国人学生との関係が密接であった朝鮮人学生金泳祿によれば、満系学生の「反満抗日運動」のために、満洲国の建国理念を体現すべきはずの建国大学としては、「その存立基盤に大きな打撃を受けるものだった」<sup>104)</sup>。それ以前、石原莞爾などによって規定されたのは、「民族協和」の原則に従って満洲における最高学府を創建することであった。つまり「人種、思想、宗教を超越して、世界的な偉人・碩学に至る」<sup>105)</sup>という構想であった。「反満抗日」事件の発生とともに、作田副総長の辞任が表明された。

102) 丁漢章〔4期生〕「国難家仇出走客 黎明風雪遠婦人」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、211-212頁。

103) 金泳祿〔2期生〕「螻蛄の夢」、建国大学在韓同窓会編『歎喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、16頁。

104) 前掲と同じ。

105) 森信三「作田先生の御退官」湯治万蔵編『建国大学年表』、建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、360頁。

作田莊一副総長の退官は、学校側としては非常に衝撃的なことであった。その時のことを、森信三は次のように述べている。「全学は愕然として驚き、建学以来嘗てない悲愁の雲に閉ざされたのである」<sup>106)</sup>。これは、作田は建国大学で非常に崇高な地位を占めていたことを示していた。作田の辞任に対して、建国大学の教職員は「慈父の死なれた人々の悲しみともいべきもの」<sup>107)</sup>だと述べた。作田副総長の後継者である尾高亀蔵は張鼓峰事件で厳しい処分を受けた元予備陸軍中将であり、学者的背景がなかった。知識人が集まる建国大学の中では、作田莊一ほど尊敬と人望を得ることがなかったと考えられる。

真覚正慶は後継者である尾高亀蔵副総長に関し次のように回想している。「張鼓峰事件の将軍が二代目として押し込んできた。関東軍の秦〔彦三郎〕参謀長が勝手に決めた天下り人事で、軍人専制の満洲でのこと、どうにもならない」<sup>108)</sup>。尾高の就任訓話が終わった後、教職員との初めの面会について、真覚正慶は次のように述べている。「長老として答辞を述べるべく、やおら進み出た竹風先生は、開口一番、声をはげまして言った。『われわれはいわば四十七士である。志操と団結は固く、いかなる風雪辛酸をも意としない。ただ私かに憂う、大石内蔵助はしっかりしているのかと』そう言ってじっとにらみつけた。将軍はカッと赤くなり、胸の勲章が小きざみにふるえて音を立てた。勝負はあった」<sup>109)</sup>。それらの逸話は、建国大学の日系教職員が、軍人出身の尾高亀蔵の副総長就任に対して不満と抗議を示したことを明らかにしている。

中国側の同窓会回想文集には、同様に作田副総長の辞任が学生に与えた衝撃が記されている。さらに、管理方式など具体的な場合に後継副総長と作田副総長の間大きな違いがあったことが記述されている。曩長林の回想には

---

106) 前掲と同じ。

107) 真覚正慶「作田先生の御退官について」湯治万蔵編、『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、359頁。

108) 前掲360頁。

109) 曩長林〔4期生〕「対偽満建国大学的回憶」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽満建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、454-455頁。

次のように記されている。「逮捕事件は、当初学者による学校管理を唱えた初代副総長作田莊一に、非常に強い衝撃を与えたと言えよう。彼は自分の面子にかけて、逮捕された学生のために四方奔走した。〔中略〕その後、作田副総長は引責辞任しなければならなかった。後継者尾高亀蔵は元陸軍中将であった。作田のような国家主義者でさえともかく理論文献を引用して学生を教化したが、軍人であった尾高はなによりも威圧により服従を強いた」<sup>110)</sup>。

『建国大学年表』には尾高副総長の管理方式について直接に指摘する箇所は少なかったが、総力戦の進展に従って建国大学研究院の研究内容にも変化があらわれたことが反映されている。『年表』によれば、1943年4月1日の「康德十年度、年度研究題目決定新部員発令進捗す」という項目では、「戦時期経済国策研究班」と共に「総力戦研究班」の編成が協議されたことが示されている。「総力戦研究班」の班長は尾高院長に任せ、研究題目は「満洲国総力戦体制の確立に関する研究」であった<sup>111)</sup>。具体的には、「総力戦研究班」の研究内容について次のように記録されている。「1、国家総力戦論（分担：尾高等）、2、総力戦における軍事体制の研究（分担：尾高等）、3、総力戦における政治体制の研究、4、総力戦における経済体制の研究」<sup>112)</sup>。さらに朝鮮人学生に対する教育にも尾高副総長は塾教育担当者との質疑応答にあたって指導意見を提出している<sup>113)</sup>。『年表』には、さらに、「1943年4月3日、尾高副総長は先頭に立ち、建国大学の学生と共に、東條英機首相の訓示を聞いた」<sup>114)</sup>と記録されている。

作田から尾高への交代にも関わらず、中国人学生は依然として秘密の読書

110) 「昭和十八年（康德十年）四月一日、康德十年度、年度研究題目決定新部員発令進捗す」、湯治万蔵編、『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、381頁。

111) 前掲 385頁。

112) 「鮮系教育について」、湯治万蔵編、『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、390頁。

113) 湯治万蔵編、『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、396頁。

114) 聶長林〔4期生〕「対偽満建国大学の回憶」、長春市政协文史和学习委員会『回憶偽満建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、431頁。

活動を行っていた。関内へ脱走する事件も続発した。こうした背景の下、中国人学生と日本人学生との矛盾も激化した。

## 第二節 建国大学における学生間の軋轢

中国側の回想録は学生間の軋轢が多く記録され、建国大学が唱えた「民族協和」が批判されている。中国人学生聂長林の回想には、日本人学生の「民族的優越感」がはっきり記述されている。

「日本人学生がよく『やつら』という言葉を使って中国人学生を軽視していた。建国大学ではよく『共学共食』を宣伝し、いわゆる『民族協和』精神を讃えていた。しかし雑穀を食べる時、日本人学生は『またコウリヤンだなあ』、『またとうもろこしだなあ』と言ってしばしばため息を出した。そのような表情と語気は、中国人学生として非常に屈辱的と思われた」<sup>115)</sup>。

聂によると、新入学生の替え歌に次のような中国を侮辱する言葉があった。「万里の長城でおしっこをすれば、支那も雨だ、モンゴルも雨だ」<sup>116)</sup>。さらに、聂によれば、他の民族の学生もあまり日本人学生と「民族協和」の話をしなかったという。「他の民族の学生が個人として日本人学生と『協和する』ことはあったが、自分の同胞の中に戻ると『裏切り者』として孤立した」<sup>117)</sup>。

聂は、建国大学が「共塾共学」を通じて、「民族協和」の精神に従って学校内の民族友好に努力したことまでは否定していない。しかし、それだけで同窓間の友情を認めることはできないと明らかに主張している。いわゆる「民族協和」は理想的な状態であり、学校当局の脳内にしか存在しなかったという。彼によれば、中国人学生と日本人学生の関係は、「同床異夢」で表現することが一番正しいという<sup>118)</sup>。

中国人学生が回想録で「民族協和」の虚偽性を批判する一方、日本人学生も建国大学における民族間の矛盾と衝突について記録している。森崎湊の日

---

115) 前掲 432 頁。

116) 前掲と同じ。

117) 前掲 461 頁。

118) 森崎湊『遺書』昭和 17 年六月三日条、図書出版社、東京、1972 年、53 頁。



記を整理・出版した『遺書』からは、日系学生の中国人学生に対する態度を見出すことが出来る。

「満系の不甲斐なさ、生活態度というか、思想というか、落ち着きのなさに日頃腹を立てているおれも、やはりよく思われることは嬉しい。人から好意を持たれると、(好意を持たれたかのようにおれが感ずると) おれは簡単に、極めて単純に嬉しくなってしまう。くそ、満系の奴らは何とだらしのないのだ。何と自覚がないのか。何という不甲斐なさだ——と夢中になって憤ることはあっても、やはり満系のものから好ましく思われると、実に他愛もなく参ってしまう。我ながら、こればかりは全く不思議に思われる」<sup>119)</sup>。

さらに森崎も日本人学生と中国人学生が友人になることが難しいという現実について困惑している。「漢民族はなかなか人に心を許さず友となりにくい、一度『朋友』となれば、その信愛の情は甚だあついという。が、なかなかうちとけない。〔中略〕満系のものと何心なくちらりと視線が合うような時、普段は好意を持ってくれているように自分が思っている相手でも、何か鋭い、決して油断していない、うかつなことはせんぞ、と言ったようなものがその白い眼に感ぜられる〔中略〕日系は悪く言えば、甘い。甘いけれどもよく言えば、満系より一本気で無邪気で気持ちも広いような気がする」<sup>120)</sup>。森崎の言う中国人と日本人の性格上の差異についていえば、むしろ、建国大学の特殊な学制によって、中国人学生が日本人学生より1年早く予備科で入学するという事情も考慮する必要がある。そして、同期の中でも、中国人の学生は日本人学生より年長であり、成熟しているという判断も可能である。

そのため、作田副学長時代には「民族協和」の実践に関し一定程度の自由な学風があったにもかかわらず、中国人学生と日本人学生とは言語、文化、さらに性格上の差異が大きく、友人になるのが難しかったとも考えられる。中国人学生の沈黙は、性格上の原因であったか、読書会など地下活動のためだったのか、状況により理由は異なると思われるが、そのような環境で民族

119) 前掲と同じ、昭和17年六月九日条、54頁。

120) 王也平〔8期生〕「衝破牢籠任鳥飛」、長春市政协文史和学习委員会『回憶偽滿建國大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、79頁。

対立は不可避であると考えられた。

建国大学の日系学生には、台湾または朝鮮から来た学生も含まれていた。彼らは自分の本名を使わず、必ず日本名を作らされた。中国人同窓王也平の回想の中には、彼と「共塾」した台湾籍の日系学生である大村重治が語った時の逸話がある。「大村重治はよく頸には『護身仏』を佩いていた。それを見て彼の中国語名前『涂南山』を知った。真顔で、絶対他の人には言わないと誓う時、彼は意外に私に『我々は中国人だ。日本人は我らを統治している人間だ』。さらに話すと、『大村重治』の意味を私に教えてくれた。つまり台湾の光復を願い祖国の山河を改めて治める意味で、『重治』と変名した」<sup>121)</sup>。台湾人学生は中国人学生と民族的アイデンティティをある程度共有していたが、日本人が行った改名、ないし日本人の植民地統治に対して不満を持っていたことが分かる。

韓国側の同窓会回想録文集には、朝鮮人学生が建国大学で感じる民族的矛盾も述べられていた。李鐘恒は、彼の回想文でまず建国大学の教職員側から受けた民族差別を明らかにした。稲葉岩吉<sup>122)</sup> 博士は朝鮮で長年生活した学者であり、建国大学朝鮮史編集会の嘱託であるが、常に朝鮮民族に対して低い評価を出していた。「稲葉岩吉博士から満洲史の講義を聴いた。その内容が何だったのか、記憶に残っている物は何もない。ただ、彼が授業のたびに示した韓国人に対する冷笑と蔑視だけは今も生々しく記憶に残っている。〔中略〕稲葉博士の説によると、韓民族が白衣を尊ぶようになったのは、良い染料が韓国になかったためだそう」<sup>123)</sup>。

李は稲葉岩吉博士の評価に民族感情を傷めたが、一方金泳祿 (2 期) は、建国大学における民族協和の実践とその過程で現れた問題と矛盾を描いた。

---

121) 1867 年生まれ、高等商業学校附属外国語学校支那語科、文学博士。京都学派の支那学の指導者。1915 年から陸軍参謀本部と陸軍大学校で講義。1922-1937 年朝鮮総督府修史官。1938 年に建国大学教授となる。

122) 李鐘恒 [1 期生] 「伊通河の水は今も流れているだろう」、建国大学在韓同窓会編『歛喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986 年、9 頁。

123) 金泳祿 [2 期生] 「蠶螂の夢」、建国大学在韓同窓会編『歛喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986 年、12 頁。

回想文「蠶螂の夢」で金泳禄は、まず共塾した何名の中国人学生を紹介した。「牛君は動物の姓を持つ満洲族の子孫だ。しっかりした清朝の家柄の末裔だと自慢している。爪が硬いから長く伸ばしても折れないのがその証拠だろう。戴君は静かで寡黙な、霧の風呂敷に思想を包んだような、何か雰囲気のある親友だ。名筆で、満展にも入選するぐらいだ。王〔用中〕君は、三角のものさしを立たせておいたような顔つきで、満洲の庶民の中の庶民という感じだ」<sup>124)</sup>。

金泳禄は在学中、何度も塾の座談会に参加した。彼は朝鮮人学生の代表として、常に日本人学生や先生と口論した。「民族の違いは若さによって比較的簡単に克服していた。言語と習慣について若干不便だったが、大きな壁にはならなかった。〔中略〕たまに塾別の茶話会が開かれた。学校が茶菓を提供し、思うままに討論してみろというのだ。民族協和の問題が中心の話題になることが多かった。〔中略〕7塾で朝鮮での内鮮一体政策が取り上げられた、満洲国の民族協和もそれを見習うべきだという話も出た。私はそれに反対の発言をした。内鮮一体は私には最悪の植民政策に思えた。それは朝鮮民族の抹殺の政策だったからだ」<sup>125)</sup>。金のような朝鮮人学生には、「民族協和」の問題で、特に座談会で「内鮮一体」政策を討論する価値は理解出来なかった。朝鮮人学生としては、「内鮮一体」は「民族協和」の意味から大きく離れ、「朝鮮民族の抹殺の政策」であるというのが常識であった。さらに、彼は次のような自分の態度を明らかに示した。「日本語の常用の強要、従って朝鮮語の使用禁止、朝鮮の歴史教育の禁止、神社参拝、東方遥拝、日本国歌の奉唱、勅語奉読などの強要、修養同士会事件など民族運動の弾圧、民族差別と経済的搾取があったのに、新天地に王道楽土を建設する基本だという民族協和がその政策を見習わなければならないということなどあり得ない」<sup>126)</sup>。

従って、植民地政策を嫌悪した金と、基本的には日系学生に対して反感を持つ中国人学生とは、精神的には近い関係にあった。金は「12・30」事件以

---

124) 前掲 15 頁。

125) 前掲と同じ。

126) 前掲 16 頁。

前、中国人学生との間に発生した一つの出来事を語っている。「満系学生は私が他の者とは違うと思うようになったこと。特にその中の三名とは塾の自習室で私の机を囲んでいたこともあって、親密の度が加速した。〔中略〕〔ある日〕私を中心として長い雑談をしている時、戴君が急に話題を変えた。『泳禄よ、相談したいことがあるんだが』『何?』〕〔中略〕「僕らが、何か集まりを持とうとする時、学校当局に知らせるのがいいのか知らせないほうがいいか、お前の意見を聞きたいんだ」<sup>127)</sup>。

金によれば、反満抗日運動は中国人学生にとって当然のことだと思われていた。「満系の学生たちにとっては当然の事だった。建国大学生に建国大学での教育の効果が、成果があったとすれば、この事件がまさにそれであって、これが満系の学生の思想を代表していると考えていいだろう」<sup>128)</sup>。

### 第三節 回想文集に記録された建国大学の崩壊

#### 第一項 日本人同窓回想文の中に記録された建国大学の崩壊。

日本人学生と中国人学生では、建国大学崩壊前後の記憶が非常に異なっている。まず、1945年8月8日から8月20日前後の出来事について、二つ集団の経験と語りは別れている。日系学生・教職員の主な回想内容はソ連軍が行った空襲および航空警報であり、学校で塹壕を掘った戦闘活動などである。一方、中国人学生は空襲が発生すると、「壮行式」の形で、新京周辺にある公主嶺に送られた。戦後の回想録文集によれば、多くの者は、当時学内で行った「壮行式」は、実際には中国人学生向けの送別会であり閉校の儀式であると考えた<sup>129)</sup>。

『建国大学年表』では、建国大学の崩壊に関する記録は、1945年8月8日のソ連の対日宣戦後、翌日から行われた全面侵攻から始まっている。『年表』では、次のように記されている。「午前零時以降、ソ連軍全面侵攻。わが国

---

127) 前掲と同じ。

128) 西元宗助の回想 (1945年8月11日)、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会 建国大学史編纂委員会、1981年、534頁。

129) 山田昌治の回想 (1945年8月9日)、前掲 531頁。

との不可侵条約破棄。対日宣戦布告。午前1時ころ、新京に敵機来襲。午前3時ころ、関東軍作戦命令発令。午前6時ころまでの間に、全面開戦に関する関東軍作戦命令発令<sup>130)</sup>。それと共に「満鮮国境警備要綱」が廃棄され、「戦時防衛規定」および「満洲国防衛法」が発動された。関東軍司令部は、南嶺の地下戦闘司令部に移動したが、大本営からは対ソ作戦準備が発令されている<sup>131)</sup>。

多くの日本人学生および教職員は、その二日間におけるソ連軍の猛烈な新京空襲について、以下のように述べている。「爆裂音地軸を揺るがし、火柱が上がる。爆音不気味に響きわたる。〔中略〕午前1時過ぎ解除」<sup>132)</sup>。「夜空に響きわたるとともに、にぶい大地をうがう様な音がする。空爆だ。〔中略〕探照灯の光が数本見えるが、飛行機をとらえることができない。夜が明けると」<sup>133)</sup>。「サイレンの音で目が覚めた。空襲警報である。塾の前のドロ柳の並木の下の壕に渡満後初めての退避。鈍い飛行機の爆音が響き、その方向で閃光が見え、しばらくしてからズシンズシンと爆発音が聞こえた。空襲である」<sup>134)</sup>。「ソ連軍が満洲領内に侵入を開始した。新京の街は騒然となり、大車に荷物を満載して南に下る者。取るものもとりにあえず身につけて新京駅に向かう者。大同大街は人々の列が行き交い、満人街の方向では黒煙が吹き上る」<sup>135)</sup>。「それまで、平穏を保っていた建国大学の生活も、ソ連の参戦により一転し、決定的な瞬間を迎えた」<sup>136)</sup>。新京は厳しい空襲に遭ったが、日本人学生は当然それをソ連の「満洲領内侵入」と考えた。学校で留守番をしていた7期、8期の日本人学生にとって、学校を守るのは当然のことであった。

日系の回想文集には作戦準備に関する記述もかなり豊富である。「深夜にたたきおこされたのは、確か八月八日であったろう、本館に駆けつけると、

130) 前掲と同じ。

131) 前掲と同じ。

132) 藤井久治の回想 (1945年8月9日)、前掲531頁。

133) 館山侑二の回想 (1945年8月9日)、前掲532頁。

134) 片桐松薫の回想 (1945年8月9日)、前掲532頁。

135) 長野広太郎の回想 (1945年8月9日)、前掲532頁。

136) 川西平信の回想 (1945年8月9日)、前掲531—532頁。

渡されたのが召集令状であった。通称赤紙と言われていたが、受け取って令状は白い紙であり、名前も書いてなければ、発行者の印刷も押してないものであった。翌朝先をとがらせた木銃を持って、新京市内へ向かった。〔中略〕われわれ『陸軍仮二等兵』が配置されたのは、郊外の競馬場であった。ここにタコ壺を掘って、ソ連戦車群を阻止することになっていた<sup>137)</sup>。「ソ連軍の満洲侵入で私の部隊（鶴岡七二八独歩隊）に非常呼集がかかり、兵砦地方正に向け出発<sup>138)</sup>」。

日系学生らは主に塹壕を掘る作業を行っていた。それは『年表』に記録されている。「ソ連軍の新興爆撃に始まった日ソ開戦で急遽召集を受けた私達は、緑園の競馬場で対戦車壕を掘っていた<sup>139)</sup>。「塾の前のドロ柳の並木の下の壕に渡満後初めての退避<sup>140)</sup>。さらに一部の学生は、8月10日関東軍の対ソ連全面作戦命令の下達<sup>141)</sup>ののち、より積極的に作戦に身を投じた。「九日、十日の大本営命令で、もっとも顕著なのは『朝鮮保衛』の任務である。〔中略〕この命令によって、皇土朝鮮の保衛が最大任務として、新たに付与されたのである。これを換言すれば、日本帝国全般の戦況上、朝鮮は最後の一線として絶対的に保衛を要するが、満洲全土は前進陣地として、やむを得ないときは、これを放棄して可なりとするにあった<sup>142)</sup>。従って、朝鮮に対する保衛任務は、戦争を体験した日系学生の一つの重大な経験として記憶されていた。草地以外の他の学生もそれについて語っている。「ソ連参戦に北朝鮮雄基<sup>143)</sup>で遭難する<sup>144)</sup>」。

その他、安倍三郎の回想「大彦族の研究」は、尾高亀蔵副総長の1945年8月11日の特別重大発言について記している。そこでは、教職員の家族を

---

137) 加納憲の回想（1945年8月9日）、前掲532頁。

138) 片桐松薫の回想（1945年8月9日）、前掲532頁。

139) 館山伉二の回想（1945年8月9日）、前掲532頁。

140) 「関東軍司令官は、主作戦を対ソ作戦に指向し、来攻する敵を随所に撃破して、朝鮮を保衛すべし。」『建国大学年表』532頁参照。

141) 草地貞吾の回想（1945年8月10日）、前掲532-533頁により引用。

142) 現在の朝鮮人民民主主義共和国羅先特別市。

143) 浅岡高義の回想（1945年8月10日）、前掲533頁。

144) 安倍三郎の回想（1945年8月11日）、前掲533頁。

朝鮮へ移動しようという内容も含まれていた。「〔前略〕2、関東軍司令部並に満洲国政府の通化転移。3、家族特に応召職員家族の通化又は朝鮮への退避」<sup>145)</sup>。そして、同じ場所で建国大学の教職員に対して以下のように命令した。「1、建国大学教職員は尾高副総長統率の下に、ソ連軍の進撃を阻止する。ただし、不同意の教職員の行動は自由とする。2、午後3時、本館において最後の教職員会議を開催する。3、日系以外の学生は四平街兵器廠（公主嶺の軍需工場の誤り）に勤労奉仕隊として参加する。4、日系学生は、大学においてソ連軍迎撃の体制に入る」<sup>146)</sup>。一部の日系学生はソ連軍の侵攻を受け、兵士として入隊した。一部の教職員は尾高副総長の指揮によって戦ったが、参加するのは義務的ではなかった。中国人学生の一部は工場で勤労奉仕を行った。そのことは日本人学生の回想文に記録されていたが、中国側の回想でも証明されている。

日系学生と教職員は、ソ連の空襲と建国大学の崩壊に直面し、感情と態度を変化させた。「今や怒涛のごとく押し寄せてくるであろう、ソ連軍の重タンク隊を前にして、われらは全く徒手空拳であった。〔中略〕肉弾といっても、まさかビール瓶で重タンクにぶつかるわけにはいかない。ただ我らにあるのは、止むに止まれぬ大和魂だけ」<sup>147)</sup>。藪敏は当時の学内状況を語っている。「学内は十六、七歳の者及び教職員とその家族だけであった。〔中略〕私は浴場で身体を洗い、水を浴びた。肌着を替え、真新しいさらし木綿を腹に巻いた。そして父母に遺書を書いた。『国体護持の御盾と散ります』という一行である」<sup>148)</sup>。「私は死への恐怖をほとんど感じなかった。国家のために死ぬのだという精神の緊張が、死への恐怖を圧倒したのかもしれない。恐怖を感じなかっただけでなく、私には一種の甘美な陶酔があった。死の世界は恐れ憎むべき対象ではなく、私の靈魂が安まり鎮まるところの安楽の世界ではないのか。私が戦死したら、私の靈魂は遠く日本に還り、父母の周辺に

145) 前掲 534 頁。

146) 西元宗助の回想 (1945 年 8 月 12 日)、前掲 537-538 頁。

147) 藪敏也の回想 (1945 年 8 月 12 日)、前掲 538 頁。

148) 前掲と同じ。



落着くのかもしれないと空想した。この空想は、その時の私には真実のように思われた。だから、私は恐ろしいことも悲しいこともなかった<sup>149)</sup>。

## 第二項 中国人同窓回想文の中に記録された建国大学の崩壊

中国人同窓の建国大学の崩壊に対する語りは、日本人同窓の回想文における記録と大きく異なっていた。多くの中国人学生が記録したのは、「壮行式」が終わって公主嶺に送られた記憶、およびその沿道での経験と民族解放の喜びであった。

建国大学 4 期生の劉成仁<sup>150)</sup> は、日本敗戦前の状態を回想している。日本敗戦前、彼は他の中国人 4、5 期生とともに「勤労奉仕」として公主嶺のある飛行機製造工場に送られた。学校側は、以前と異なって、労働時間について何も言わなかった。彼らはその時、昌図や開原<sup>151)</sup> の国民高等学校の卒業生の学生と一緒に勤労奉仕を行っていた。8.15 の前後について、彼は次のように回想している。「8 月 9 日朝 7 時ごろ、公主嶺に行って視察した尾高亀蔵副総長は我らと一緒にラジオ放送を聞いた。日ソ開戦の報を聞いて、彼は自分の気持ちを抑えられなかった。〔中略〕突然に立って、『もう終わった!』と嘆いて、すぐに新京に戻った。〔中略〕その日、アメリカが長崎で第二の原子爆弾を投下したというニュースが流れた。我らはとても喜んだが、日本人兵士と労働者の表情は非常に悲痛であり、ある人はこっそり泣いていた。工事を監督する日本人も我らの作業場にあまり来なくなった<sup>152)</sup>。劉は何名かの中国人学生と集まって、時局について討論した。ある人はすぐに故郷に戻ると主張した。作業と労働はまったくしなかった。劉の回想によれば、8 月 11 日から 8 月 13 日の空襲を経た後、8 月 14 日夜 8 時ごろ、全員歩いて学校に戻ると塾頭が号令した。人数を数えると、数名の中国人同窓がいなくなっていた。劉と一緒に学校に戻ろうという日本人塾頭の要求には応じ

---

149) 劉成仁、建国大学 4 期生であり、退職前に遼寧師範大学党委副書記として勤めた。

151) 両方とも中国吉林省の地名。

152) 劉成仁〔4 期生〕「黎明前的抗争」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建國大學——長春文史資料総第 49 輯』、1997 年、64 頁。

なかった。塾頭は公主嶺の作業現場で建国大学の解散を宣言した。中国人学生は現場にそのまま留まったが、日本人学生と塾頭はその後に一緒に学校に向かった<sup>153)</sup>。劉の回想を読めば、建国大学学生が長い間校外で勤労奉仕などの肉体労働を強いられていたことが分かる。そのような総動員は建国大学一校ではなく、満洲国の他の高等教育機関でも行われていた。

薛文<sup>154)</sup>は回想文で、劉成仁の記憶を裏付けている。薛によれば、1945年、第3期の学生が卒業した後、8月には4期から6期までの学生が公主嶺に派遣され、飛行機工場で勤労奉仕を強いられた。薛は学校で留守した7、8期の中の上級生として、「総務」に任命され、もう一人の学生と共に当番をさせられた。8月13日の昼食後、学生の安全を確保するとの理由で、尾高亀蔵副総長が学校にいる学生全員に対し公主嶺への移動を命令した。〔中略〕日本人学生はその時いなかったが、白系ロシア人学生はソ連の宣戦のため集中監視されていた。そして我ら160名の学生は6個の小隊に編成された<sup>155)</sup>。薛文は総隊長に任ぜられた。8月14日の正午、彼らは公主嶺に向かう陶家屯で、上級生の劉成任らが新京へ向かったという知らせを聞いた。薛らが公主嶺に到着した時、飛行機製造工場には誰もいなかった。薛はその時の光景を次のように記述している。「部屋の中は電灯が消えて暗闇となった。〔中略〕台所に行ってみると、鍋には米飯がそのまま残されていたが、もう一つの鍋にはできたての料理があった。明らかに彼らの食べ残したものであった。部屋の中は乱雑で、大きな角煮はかまの上に落ちて散らばっていた。彼らが慌ただしく出発したのは明らかであった<sup>156)</sup>。薛文の回想によれば、その時公主嶺飛行機製造工場は混乱していたが、日本人塾頭は学校に戻るよう命令した。中国人学生はその目的が塹壕を掘るためであると判断し、意欲を失った。そして、多くの中国人学生は現場で脱走した。

153) 前掲 65—66 頁。

154) 薛文、建国大学7期生であり、退職前に遼寧省法庫県教師学校に勤めた。

155) 薛文〔7期生〕「記八・一五前後の日日夜夜」、長春市政協文史和学习委員会『回憶 偽滿建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、68頁。

156) 前掲 68-69 頁。

彼らを監護した者は、後期の塾頭である佐藤久吉助教授であった。彼は逃げた学生が多いことに対して特に怒りを発することもなかった。薛と他の中国人学生も脱走しなかった。薛はその理由を次のように述べている。「夜には多くの人々が脱走したことを知ったが、特別の会議もなく秘密連絡もなかったので、私はそのまま待機することにした。私は総隊長として責任を持ち、最後まで留まると決心していた。私は一人で無勢であったが、一緒にいた人たちは、そのことを知って、自発的に私と一緒に留まり、私を助けてくれた」<sup>157)</sup>。薛文らは、佐藤久吉助教授及び柔道部の中島三郎助教授が武器を所持していないことを承知しており、脅威を感じていなかった。そして薛文らは、監督教員らに現地解散の要求を提出した。薛は次のように回想している。「私は現地解散という要求を提出した。〔中略〕私は話を続けて『新京に戻るといふ方針は、新京を出発した時の尾高副総長の講話の精神とは異なる。尾高副総長は、この戦争は私たち中国人とは関係がないと述べた。なぜ今さら私たちを新京に戻すのか。新京は私たちにとっても安全ではないと考える。家に帰らせて欲しい』。〔中略〕佐藤は若干躊躇したもの、最後には私たちの要求に同意した」<sup>158)</sup>。薛の回想によれば、劉房子鎮南頭のある小学校の空き教室の中で、佐藤助教授は家に戻りたい学生全員に承認書を書いて印鑑を押し、さらに交通費を支給した<sup>159)</sup>。

薛文の回想が明らかにしたのは、戦争の最終局面では、建国大学は正常の教育活動を行えなかったことである。学生は年級により別々に工場で勤労奉仕を強いられ、戦争に巻き込まれた。新京が空襲に遭った後、建国大学当局の指揮と指導は混乱し、統一的な撤退や留守の命令はなかった。上級生は公主嶺から学校へ撤退させられた。下級生は同時期に二人の教職員の指揮の下に公主嶺へ移動させられたが、上級生の学校への撤退現場を見て、臨時的に学校へ戻ることを決定した。それらはある程度建国大学の崩壊以前の混乱した状況を反映していた。直接に戦争に参加してなかった中国人学生の脱走は

---

157) 前掲 70 頁。

158) 前掲 70 頁。

159) 前掲 70-72 頁。

不可避であると考えられる。そのゆえ、建国大学の閉校儀式に中国人学生がほばいなかったのは自然であるといえよう。

その以外の回想文にも、建国大学崩壊に関する記録が多く見られる。紙面の都合で贅言しないが、中国人学生の回想文の題目と、彼等の主観的色彩が反映されるキーワードだけをまとめておこう。宋紹英<sup>160)</sup>は回想文「前夜大逃亡」の中で次のように書いている。「8月15日の正午に〔中略〕日本の無条件降伏というニュースを聞いた。〔中略〕我が愛国青年は、喜びと興奮に満ちた気持ちを言葉では説明できないほどであった。〔中略〕8月14日の公主嶺の夜は、平凡な夜ではなく、壮観な大逃亡の夜であった」<sup>161)</sup>。王也平<sup>162)</sup>は回想文「冲破牢籠任鳥飛」の中で、8月12日（あるいは13日）午後、公主嶺に撤退した時の様子について、次のように述べている。「足取りは荒々しくて、軍事訓練の姿とは見えなかった。速度もあまり速くなかった。今後、行き先はどうなるのか。恐らく全員が歩きながら考えていた問題である」<sup>163)</sup>。その後、彼らの隊列は、「大路歌」、「満江紅」、「開路先鋒」など以前は公式に禁止されていた抗日歌曲を大声で歌い始めた<sup>164)</sup>。

### 第三項 朝鮮人回想文献の中に記録された建国大学の崩壊

日本人同窓生藤井久治は1945年8月11日のことについて、次のように回想している。「鮮系学生では済州島出身のY<sup>165)</sup>一名が加わったが、他の鮮系学生の参加しないのを見て、いつのまにか姿を消してしまった」<sup>166)</sup>。その他、在韓同窓会から刊行された建国大学朝鮮人学生の回想文集の中には、日本敗

160) 宋紹英、建国大学8期生。東北師範大学教授。東北師範大学日本研究所所長を務めた。

161) 宋紹英〔8期生〕「前夜大逃亡」、長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、75-76頁。

162) 王也平、原名は王振淮であり、建国大学八期生である。武昌中南民族学院教授として勤めた。中国農工民主党湖北省委員会常委、常務副秘書長に任ずる。

163) 王也平〔8期生〕「衝破牢籠任鳥飛」長春市政協文史和学習委員会『回憶偽滿建国大学——長春文史資料総第49輯』、1997年、82頁。

164) 前掲と同じ。

165) 名前は詳細不明。

166) 藤田久治「1945年8月11日」、湯治万蔵編『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会、1981年、535頁。

戦前後の各自の思想に関する回想文がある。

まず、彼ら朝鮮人学生の戦争末期における苦境および出陣強要に関して、以下のような回想が見られる。「戦争末期の極度の食糧難と勤労動員に苦勞していた。防空訓練と徴用・徴兵が強制されて、供出も食糧から真鉄製の食器やアルミにまで拡大され〔中略〕広島と長崎に原子爆弾が投下され、ソ連軍が極東戦に参加してから、まもなく日本の無条件降伏で8・15の解放を迎えた。祖国の光復の喜びと抗日闘争に直接参加できなかつたくやしさが交錯した」<sup>167)</sup>。彼の語りには、日本敗戦に対する喜びが明白に表現されている。

さらに、1945年の前期、日本人学生とともに、朝鮮人学生も勤労奉仕活動への参加を強いられた。そのような武器生産活動の現場で、崔興喆という朝鮮人学生はいわゆる満洲国の最高学府のエリートとしての身分に対して疑念を懐いた。「1945年の5月頃、奉天兵器廠へ勤労動員に行った。〔中略〕兵器廠の広い構内には赤いレンガの建物が立ち並んでいて、片方の建物は何ヶ月前の爆撃で壁だけが寂しく残っていて、戦争というものを実感させてくれた。〔中略〕勤労奉仕期間中にはたまに無償で現物が支給された。ある時、運動靴が支給された。私は各自の足に合う靴を分ける妙案がなく〔中略〕固い表情で不平、不満を言い出す者がいた。〔中略〕空襲警戒警報のサイレンが鳴ったときのことだ。サイレンが鳴ると足の早い者は労務者たちとひとかたまりになって前へ前へと走っていった。出口に行くとも門は閉まっていて、彼らは数百名の労務者とおしあいへしあいしていた。幸いに爆撃はなく、我々は作業場に戻った。私は皆が冷静になるのを待ってから、『将来、民族の指導者になると自負しながら最高学府で学んでいる我等が労務者たちと一緒にしあいへしあいしていいだろうか?』と怒った。すると、後ろから魏贊壽が、『皆の前で面駁するとはなんだ?』とどなった。人は災害や危機に直面した時に本音を見せるという。満洲社会では珍しく最高教育を受けている我等が運動靴などで顔を赤め、空襲警報ならぬ警戒警報で我先にと走

---

167) 朴熙昇「建国大学生生活の回想」、建国大学在韓同窓会編『歎喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、68頁。

り回る、理性を超えた利己的本性を改めて考えた」<sup>168)</sup>。朴とは異なって、崔は日本人に対してそのような厳しい民族感情を持っていなかった。彼は逆に自分を満洲国建国大学の優秀な人材として認識した。しかしそのような理想を抱いたまま、勤労奉仕の武器生産の現実に巻き込まれた彼には、矛盾した認識が生まれた。

日本敗戦前後の状況に関して、崔は次のように回想している。「8月10日頃、長春にいた叔父から意外な電報をもらった。彼は各官公署で突然機密文書を焼却しだしたのを見て、日本の降伏が近づいたと直感して電報を打ったのだ。長春に戻った私は、数百名の日本人婦女子たちが子供を負ぶったり荷物を持ったり背負ったりして、老いた男性たちに引率されて最寄りの駅へ席立てられているみすぼらしい行列をたびたび目にした。それまで威厳と虚勢をはった日本人だけを見てきた私にはとても大きい衝撃だったし、その人たちに敗戦がもたらす悲惨と痛みが、長い間、私の頭を離れなかった。〔中略〕8月15日の正午、日本の天皇の重大放送を耳にした。録音状態が悪くて聞き難かったが、明らかに降伏するという内容だった。大学に行ってみようとしたが、外は騒がしく中国人たちはこん棒とハンマーを振り回して、銃の音がうるさかった」<sup>169)</sup>。彼はその衝撃的な場面を体験し、建国大学学生としての人生が終わったという幻滅も感じていた。

安仁建の回想は、出自ごとに異なる学生の態度を記録している。「8・15前後は本当に緊迫感があった。8月9日にソ連の宣戦布告があった後、塾内もざわざわと騒がしくなった。ソ連軍は宣戦布告と同時に破竹の勢いで南進しているから、間も無く新京にも入城するだろうという。〔中略〕学校当局も前期の全学生を集めて、『私たちは最大限、学生の勉学の環境を維持しようと努力したが、ソ連軍が侵攻して来ようという今や、勉強を継続することはできなくなった。従って学校に残って戦闘覚悟で死守するか、公主嶺の勤労奉仕隊に行くか、自由意思で選択しろ』と言った。もちろん、日本人学生た

168) 崔興喆〔6期生〕「建国大学の生活を考える」、建国大学在韓同窓会編『歿喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、75-76頁。

169) 前掲と同じ。

ちは死守するという方で、韓国と中国の学生たちは大部分勤労奉仕隊を選んだ」<sup>170)</sup>。

「作業場に到着したときには人数がかなり減っていた。途中で中国の学生たちがそっと隊列から離脱したからだ。戦争が終わりに近づいたこの時、なにか勤労奉仕だという心情だったのだろう。奉仕隊が作業場にくたびれて到着し、居眠りをしながら休んでいると、再び新京に帰れという指示があった。その指示は学校本部からきたものだと言われた。私たちは妙だと思った。何日もかけて作業場まできたのにスコップさえ触らずに直ちに戻れというのはおかしな話だった。〔中略〕引率の教授もその理由は知らないというので、とにかく教授と一緒に新京に向かって出発するししかなかった」<sup>171)</sup>。この部分は、勤労奉仕に参加した中国人学生と朝鮮人学生の現場での行動の違いを明らかに示していた。中国人学生が途中で自主解散したことは、中国側の回想文における内容と符合している。「どれほど戻ったのか、深い山中で中国の学生たちが隊列を止めさせ、引率の教授に、我々は新京に戻らないから即時解散し、皆を自由行にして欲しいと要求した。中国の学生は前もって合意していたようだった。数人の教授たちは相談して、その意見を受け入れ、勤労奉仕隊はその場で解散された。〔中略〕ところが解散されると、中国語もできず、ここがどこなのかもよく分からない私はとても慌てた。通化を通して韓国に行こうという考えもあったが、韓国の学生3、4名は相談して、一旦新京に戻ることによって決めた。中国の学生たちもばらばらに散っていった」<sup>172)</sup>。勤労奉仕の途中で脱走した人々は、その後異なる人生の道を歩み始めた。「建国大学はもう解散されてしまい、韓国の学生たちは先輩の指導で青年同志会に入会して、韓国の将来を建設する人物になると決めたようだった」<sup>173)</sup>。

金鎔熙は回想文の中で、1945年7月の出来事を以下のように語っている。

---

170) 安仁建 [7期生]「建国大学生は寂しくない」、建国大学在韓同窓会編『歆喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、78-80頁。

171) 前掲と同じ。

172) 前掲と同じ。

173) 前掲と同じ。



「1945年7月だと記憶する。『検閲点呼召集令状』がきた。部隊で一日中ずつと予備訓練を受け、午後遅くに学校へ戻った。とうとう私も行くのかという切迫した緊張感を感じた」。「8月9日、一週間の休暇をもらい帰省した」。「新京を出発する時に〔中略〕これが建国大学との永遠の別れになるとは誰が予想しただろう！」<sup>174)</sup>。この回想によれば、金らは8月9日に帰省してから、学校に戻らなかったと判断できる。「8月15日、日本は連合軍にとうとう無条件降伏した。韓国は自動的に解放を迎えた。その時その瞬間の感激は表現できないが、一面では寂しく虚脱感があった」<sup>175)</sup>。この感覚は、大きな喜びを示した中国人学生や他の朝鮮人学生とはやや異なる。金は、その時感動と興奮の気持ちではなく、逆に空虚感を味わっていた。そのような気持ちを持った朝鮮人学生は少なくなかったようだ。彼らは建国大学に在学した時さえ二重身分という自己認識を持っていた。彼らは戦後に韓国社会の各界で活躍するが、他方で積極的に同窓会活動にも参加した。その理由も、彼らの二重のアイデンティティ、または終戦前後の複雑な気持ちに根拠を見出せると考えられる。

安光鎬は次のように、その複雑な気持ちを描写している。「1945年8月15日、日帝の桎梏からの解放の喜びはあったが、韓国内に根の深くない20代青年、建国大学同窓の皆がそうであるように、避けられない混乱と建国期の試練を経験せざるを得なかった」<sup>176)</sup>。

## 第五章 建国大学の同窓会

### 第一節 同窓会の概況

#### 第一項 満洲関連同窓会の中心的組織としての「国際善隣協会」

関東州から数えれば、40年にわたる日本の植民地統治・傀儡政権による統治は敗戦とともに終焉を迎えた。その後、5年のうちには、半数以上の日本

174) 金鎔熙 [8期生]「建国大学生生活の回顧」、建国大学在韓同窓会編『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、88頁。

175) 前掲と同じ。

176) 安光鎬 [1期生]「渺茫三千里」、建国大学在韓同窓会編『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、105頁。

人が満洲地域から日本へ引揚げた。満洲および大連からの引揚者の総数は 120 万人にのぼった<sup>177)</sup>。坂部晶子によれば、満洲の同窓会は戦後、異なる時代と各学校の機能にしたがって、その性格や色彩は異なっていた。「学校の同窓会のなかでも『建国大学同窓会』や『大同学院同窓会』などのように『満洲国』の中枢の教育機関を前身とするものは、戦後比較的早い時期(昭和 20 年代)に設立されている。あるいは、戦後の『満洲』経験者の集まりのなかでも、『満洲』関連資料の収集や関連団体の連絡などに大きな影響力をもった『国際善隣協会』、また『「関東州」の居住者を中心につくられた大規模な団体である『大連会』なども、戦後時間をおくことなく結成されている」<sup>178)</sup>。

戦後の日本社会では、満洲から帰国した引揚者を対象とした政府組織が存在しなかった。満洲からの引揚者の間では相互に連絡する必要が生まれ、それを通じて、彼らの「再集団化」を実現したいという期待が高まった。そのようなネットワークを作り上げる途上で、彼らは関連する同窓会を組織し、さらに満洲での生活を再構成するために、回想的な各種の出版物を刊行した。そのような出版物には、満洲時代の風景、都市の姿、ないし満洲の生活用品に関する一連の引揚者の回想を喚起する記事が盛り込まれていた。

原明緒人編『遙かなる大地 満洲再見』(1985 年)<sup>179)</sup>では、「満洲関連団体名簿」が掲載されており、満鉄など会社の同窓会を含む同窓会がリストアップされている。坂部晶子は 1999 年にそれらの帰国者団体に対してアンケート調査を行った。坂部の調査によれば、満洲時代の学校の同窓会は同窓会全体の 73.6% を占めていた<sup>180)</sup>。「満洲」と「大連」を除き、満洲における戦後同窓会では、1945 年成立された「建国大学同窓会」、「大同学院同窓会」など満洲の中核的な教育機関の戦後同窓会が早くから存在していたことが分か

177) 厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』、1977、689-690 頁。

178) 坂部晶子「『満洲』経験の歴史社会学的考察：『満洲』同窓会の事例をととして」、『京都社会学年報』第 7 号、1999、101-120、107-108 頁。

179) 原明緒人編『遙かなる大地 満洲再見』、教育書籍、1985 年。

180) 坂部晶子、「『満洲』経験の歴史社会学的考察：『満洲』同窓会の事例をととして」、『京都社会学年報』第 7 号、1999、101-120、107 頁。

る。彼らの上部組織であり、満洲に関する関連資料の収集と関連団体の連絡に重大な役割を果たしたのが「社団法人国際善隣協会」である。

社団法人国際善隣協会の歴史は1942年2月2日に遡ることができる。設立当初には当時の内閣総理大臣東條英機の許可を得て「社団法人満洲交友会」と称した。その後、1942年5月16日に、「社団法人満洲会」と改称された。日本の敗戦と満洲国の崩壊とともに、1945年11月30日に「社団法人昭徳倶楽部」と改名された。1946年11月29日の第12回通常総会で「社団法人国際善隣倶楽部」と改名する決議が通過し、1947年7月18日には外務省の公認を得た。その後20余年を経て、1972年5月1日に開催された第61回通常総会で「社団法人国際善隣協会」と改称された<sup>181)</sup>。

遡って見ると「社団法人満洲交友会」の時に、満洲重工業総裁の鮎川義介は満洲国の成立10周年を祝うため、張景恵に百万円を贈ったが、張はその金を満洲交友会に寄付した。満洲交友会はその百万円を設立資金として使った。国際善隣協会の私家版史料では、その百万円の使途に関し、記述の差異がある。日本の政界と軍隊の要人が満洲交友会の初代会長と幹部陣に任用された。例えば、初代会長には陸軍大将本庄繁が、副会長には陸軍中将筑紫雄が就任した。顧問にも各界の大物が任ぜられた。その中には東條英機、星野直樹、岸信介、土肥原賢二、鮎川義介、小磯国昭などがいた<sup>182)</sup>。そのころの人員配置について、『社団法人国際善隣協会五十年のあゆみ』は次のように記している。「役員との顔触れとこの最初の定款から明らかなのは、満洲交友会は満洲関係のエリート集団、サロンとしての存在であって、公益法人としての色彩は薄いということである」<sup>183)</sup>。第二次世界大戦終結後、社団法人国際善隣協会は、戦後在満日本人ネットワークの結節点として重要な機能を発揮した。建国大学同窓会など満洲国高等教育機関の卒業生も引揚げ後に続々と社団法人国際善隣協会に参加した。

客観的な側面から見れば、国際善隣協会は戦後「満洲国関係者」の帰国お

181) 国際善隣協会、『社団法人国際善隣協会五十年のあゆみ』、6-9頁。

182) 前掲17頁。

183) 同上。

よび善後処理などの事務事項で重要な役割を果たしたと判断できる。戦後満蒙地区の在留邦人は 120 万人にのぼった。国際善隣協会は満洲国駐日大使館および満洲国駐日主要会社の代表者の協力を得て、帰国者向けの援助機関を設立した。その際、「財団法人満洲国関係帰国者援護会」も善隣協会によって設立された。1946 年 3 月 15 日、援護会は「財団法人満蒙同胞援護会」と改名され、次のような事業を開始した。「引揚げ促進事業、援護並びに職業の相談、調査並びに資料の収集、満蒙に関係する歴史資料の収集、引揚者全般に必要な事業、その他本会の目的を達成する為必要と認めた事業」<sup>184)</sup>。

国際善隣協会は戦後 10 年間、満洲国関係者らが東京で活動できるサロンとして運営された。善隣協会では、様々な行事、会員の教養・親睦・厚生活動などが行われた。1954 年から始まった支援事業は次のように記録されている。「1954 年からアジア諸国の留学生への援助、1955 年日韓親和会への援助、戦犯に対する見舞金贈呈、1955 年学校法人亜細亜学園への援助、1956 年終戦研究委員会への援助、1959 年善隣友誼会への援助、1966 年財団法人勸学院後援会への援助、1976 年日中孤児問題連絡協会への援助事業」など。

上記の「日韓親和会」という組織は、戦後の日韓両国人民の共通の理解により、1951 年に東京で発足した団体であった<sup>185)</sup>。会長は終戦時の鈴木貫太郎内閣の内閣情報局総裁である下村宏<sup>186)</sup>であり、副会長は幣原喜重郎内閣の大蔵大臣渋沢敬三<sup>187)</sup>であった。親和会の主な目的は、法務省大村収容所から仮放免される朝鮮人に保証金を貸借することである。例えば「身寄皆無、引取手の無い 200 名の保証金一人につき 5000 円計百万円を借り受けたい旨の懇請があった、償還期間は半年ないし一年」<sup>188)</sup>となっていた。居住登録が済み次第、各個人毎に逐次償還、無利息という条件であったが、「協会と

---

184) 国際善隣協会『社団法人国際善隣協会五十年のあゆみ』、43-44 頁。

185) 前掲 196-197 頁。

186) 下村宏、1875-1957、昭和時代の官僚。その時は内閣情報局総裁。

187) 渋沢敬三、1896-1963、昭和時代の財界人、幣原内閣の大蔵大臣。

188) 国際善隣協会『社団法人国際善隣協会五十年のあゆみ』、197 頁。

しては善隣友好の建前から債務者を日韓親和協会として仮払金処理をし、30年4月百万円を貸し付けた」<sup>189)</sup>。

戦犯に対する見舞金贈呈は第三国の戦犯向けの援助活動である。1958年4月までに巢鴨拘置所を出所した者延べ65名に対し、総額65万円の見舞金を支出して慰問した。1959年1月、中華人民共和国の李徳全<sup>190)</sup>(当時中華体育総会副主席)の来日により、撫順に拘留中の日本人戦犯28名の氏名が判明したので、同年度より会員に呼びかけ慰問状を送るとともに、日本赤十字社を通じて三年間慰問品を送付し、併せて留守家族にも見舞品を送った<sup>191)</sup>。

日中国交回復後、中国との交流活動では、国際善隣協会も重要な役割を果たした。1979年、すなわち日中平和友好条約調印の翌年に、国際善隣協会は、初めて駐日中国大使館を訪問した。その訪問は、「協会の性格から言って不思議といえば不思議」と評価された<sup>192)</sup>。1980年6月29日から7月9日にかけて、協会は初めて「善隣友好訪中団」の形で中国東北地区を訪ねた。その時、訪中団は中日友好協会副会長孫平化の接見を受けた。

要約すると、国際善隣協会は戦後日本人の引揚および善後処理の諸事業に積極的な活動を展開した。特に隣国と友好関係の促進には重要な架け橋として活躍した。国際善隣協会は様々な満洲国関連機構の同窓会と連絡があり、建国大学の同窓会も善隣協会と密接な関係にあった。

## 第二項 建国大学戦後同窓会

### (1) 建国大学戦後同窓会の発足

建国大学は1945年に閉校された<sup>193)</sup>。その後、中国人学生の解散および他

---

189) 前掲197頁。

190) 婦人政治家、河北省通県出身。馮玉祥夫人。1965年人民政治協商会議全国委員会副主席、全国婦女連合会副主席であった。『中国人名事典——古代から現代まで』、日外アソシエーツ、1993年、652頁。

191) 前掲197頁。

192) 日本建国大学同窓会編(国際善隣協会気付)『建国大学同窓会、日本でのあゆみ』、2007年、211頁。

193) 建国大学の閉学宣言は1945年8月23日に発表された。

民族の学生の帰国とともに、日本人学生の引揚げが行われた。その時、一部にはソ連軍によりシベリアに抑留されたものもいた。彼らの復員帰国に関する交渉も困難な仕事であった。

従って、如何に日本人学生と家族の生計を確保するかが問題になった。さらに、卒業できなかった学生らの内地大学への編入などの手続きを準備しながら、各地の消息および情報を収集し、学生のために各界と連絡する機能を備える組織が必要だと考えられた。1948年になると、東京、京都、福岡など主な地区において幾つかの同窓グループが発展してきた。そのような同窓グループの成員は、建国大学の学生のみではなく、他の学校の学生も含まれていた。彼らは交通・連絡における有利な条件を用いて、さまざまな活動を行っていた。その時の主な業務は、学生の互助活動および戦後引揚げ者向けの援護活動などであった。

戦後、連合国軍最高司令官総司令部が軍国主義者に対する公職追放などを行い、超国家主義団体に対する解散指令も発出された。一方、一部の建国大学学生と教職員には、戦争責任が課される可能性もあった。それぞれの圧力の下、学生たちを内地の大学に編入する必要性が増大した。この時期、互助会的な性格を持つ同窓会組織は、多くの証明書の発給などの事務を行なった<sup>194)</sup>。

## (2) 建国大学同窓会の活動概況

上述したように、建国大学同窓会は学生互助会により、各学生グループに応じて、戦後の引揚げ者援護事業などの仕事を行なってきた。善後処理など仕事が終わってから、建国大学同窓会の活動は主として同窓会名簿の編集・発行および会報・会誌の出版に注がれた。終戦直後の段階では、日本社会を再建設するために日本人同窓が身を投じたが、国際政治の面では冷戦の政治環境の下、日本同窓会と海外同窓との連絡条件が客観的に制限されていた。そのため、建国大学の同窓会活動は主に日本国内で行われた。日本国内の同窓との連絡は、建国大学同窓会が名簿を編纂する際の最も主要な目的であっ

---

194) 日本建国大学同窓会編 (国際善隣協会気付) 『建国大学同窓会、日本でのあゆみ』、2007年、1頁。

た。

建国大学同窓会は、第1版の同窓会名簿を1952年12月に出版した<sup>195)</sup>。その後、名簿は定期的に更新され、ページ数も国内および海外同窓との連絡の拡大とともに増加した。最初の1952年12月版の名簿は63頁であり(B5版)、1981年6月1日発行の建国大学同窓名簿は149頁になった(A5版)<sup>196)</sup>。

さらに、同窓会総会などの活動も建国大学同窓会により定期的に行われた。初回から遡れば、第一回の同窓会総会は1953年1月16日に開催された。その時の会場は東京の虎ノ門共済会館であった。その時の建国大学同窓会事務局は単なる建国大学総会のための事務局ではなかった。事務局の住所は財団法人日本興学会および建国大学3期生の同窓会「三喜会」の連絡事務所と共有していた。その後、1954年5月2日に、第1回同窓会総会が正式に開催され、初代会長には建国大学の元副総長、名誉教授作田荘一が選任された。建国大学同窓会関連史料によれば、同窓会総会の開催場所は主に東京圏に分布していたが、東京外で開催した時もあった。例えば、第15回総会(1968年5月12日)の会場は京都大学楽友会館であり、第22回総会(1975年6月7日)の会場は京都平安神宮会館であり、第24回総会(1977年6月4日)の開催場所はホテル名古屋キャッスルであった。総会の開催場所は固定されていなかったが、当時の幹部および会員の都合で決めたと思われる。同窓会総会の開催日付は主に土曜日であったが、そのことは、同窓会活動が親睦目的で行われていたことを明らかに示していた。1980年代以降、同窓生の定年退職とともに、同窓会総会の活動内容は多岐にわたるようになり、会費も1952年当初の300円から1980年代には8000-10000円となり、その後、金額は一度も減額されることがなかった<sup>197)</sup>。

さらに建国大学同窓会は戦後海外同窓との連絡・交流活動を熱心に展開し

---

195) 「建国大学同窓会(日本国内)同窓名簿」、日本建国大学同窓会編(国際善隣協会気付)『建国大学同窓会、日本であゆみ』、2007年。

196) 前掲と同じ。

197) 前掲と同じ。



た。『建国大学同窓会、日本でのあゆみ』によれば、1992年9月に建国大学日本戦後同窓会により、第1回の「同学合同交歓会」が中国の北京・天津で開催された。その時の交歓会旅行団団長林田隆は次のように回想した。「建国大学の精神を子々孫々に受け継いで貰えないかということを真剣に考えるようになったのでした。〔中略〕この意欲に正面から取り組んでみたいという思いから、一期の坂東・斎藤両先輩にも相談し、従来と同窓会とは別に来日留学の同窓諸子を中心にした懇談会をもってはという事になり、早速素案をまとめて幹事会に諮った所満場一致で賛同を頂いたのでした」<sup>198)</sup>。

第1回の家族・子女懇親会は、1993年12月5日に首都圏の同窓生および来日中国同窓の子女の間で開催された。2ヶ月前の1993年10月までに、建国大学同窓会幹事は首都圏に暮らしていた中国同窓生の子女を確認し、彼らの名簿を作成した。その際、主に7、8期の同窓生がその懇親会の準備を行った。会報の記事によれば、参加者は100名に近かった。44名の同窓生が参加し、同窓生の妻2名を含めて日本人は46名であり、中国同窓の子女は51名であった。建国大学同窓会幹部長長野広太郎は次のように述べた。「親しさに溢れた絶え間ない会話、明るい笑顔、あちこちに湧きあがる笑声、満員の会場から醸し出される熱気、若者たちの活力。〔中略〕こんなに和氣に満ち、信頼と親密感を実感できる会は珍しい。ふと頭の隅を『建国大学は消滅したが、その精神はここにも生き続けている』という想いがよぎったのは、あながち私一人ではなからう」<sup>199)</sup>。

その後の同窓会会報では、当時の会長林田隆が「若い世代に希望を托す」と題して新年の挨拶を記し、建国大学同窓子女の間の懇親活動をもっと多く実現すると主唱した。「青春時代の出会いと思い出を胸に秘めながら、心情的親睦交流を続けている多くの海外同窓との繋がりも、やがて歴史の一ページとして消え去る同窓会なのか、身をもって体験した複合民族との思想・生

---

198) 日本建国大学同窓会編(国際善隣協会気付)『建国大学同窓会、日本であゆみ』、2007年、25頁。

199) 長野宏太郎「和やかな懇親の輪広がる ― 首都圏来日中国子女との集い」、建国大学同窓会編『建国大学会報』第51号、1994年2月10日、3頁。

活習慣・心情等の貴重な経験を何らかの形で心ある人々に受け継いでもらう事により、今後の地球的規模による民族共存共栄の難問解決の一助にする念願と努力を、同窓会としても取り組むべきではないかという同窓会運営の基本に対する姿勢なのであります」<sup>200)</sup>。

### 第三項 建国大学の刊行物に関して

建国大学の会報は、建国大学同窓生が戦後建国大学同窓会組織を設立した時、刊行された同窓会刊行物であった。会報の創刊号は二つがある。『建国大学同窓会史』(2007年)によれば、第1号建国大学会報は1954年5月15日に刊行されたが、同年の11月25日にはもう1回の創刊号会報が刊行された。第2号会報は1955年6月30日に出版され、第3号の詳細は不明であるが、第4号は1957年7月30日に出版された。その後、建国大学同窓会幹部間の調整が行われた後、坂東勇太郎が会長に就任して、同窓会会報の刊行活動を再発足させた。坂東により刊行された会報の創刊号は1962年に刊行された。後者の創刊号の第1頁において「会報No.1と銘打って会員名簿の発送御通知をかねて第一回総会の模様を御知らせしたガリ版刷りを発行した」という。その経緯について、阿蘇谷博は1962年の創刊号について次のように記している。

「会報発行は正式には二十九年からであるが、終戦後それまでの数年間においていろいろの事績はもとより存在する訳でありそれらについては最後に触れる事をした。〔中略〕そこで二つのNo.1であるが〔中略〕旧No.1の全文(B4版表裏)と新No.1の第一頁および第一回同窓会の開催通知書を再録添付することとした。以下第五号まではいずれもその号順をNo.と表示してあるが、第五号以下については第〇号という形式になっている〔中略〕等について重複している点に疑問を抱かざるを得ない。いろいろ検討した末の結論は、当初シンキョウ社に同窓会事務所があって、一期小山さんが事務局長を勤めておられたときに発行順に付番されていたものが、三十七年に坂東

200) 林田隆「若い世代に希望を托す」、建国大学同窓会編『建国大学会報』第51号、1994年2月10日、1頁。

勇太郎方に事務所が移転し、一期坂東さんが事務局長に就任して手がけられた最初の会報が改めて No.1 とされたことに基づくものではないか、ということである。〔中略〕引き続き No.2 以下が発行されているところから察するにこの推測はまず間違いあるまいと考えられる。〔中略〕なお、会報は従来毎年一回発行されてきたが、五十七年以降は年四回発行に改められ今日に至っている。因みに、五十五年十月一日号と五十六年の第十八号は歡喜嶺会訪中旅行団の報告を内容とした臨時号である」<sup>201)</sup>。

現在確認されている建国大学の会報および会誌の発表経緯に対して、建国大学の第 28 号会報では次のように記している。

「(三期会の会誌である『三喜会』の) 第一号が二十三 (1948) 年十一月一日に発行されて以来、三十 (1955) 年の第二号以降は毎年一回発行され、五十八 (1983) 年十二月には三十号がお目見えした。第三号『迎春花』以降は毎号大陸に因んだ名前が冠されるのがその特色である」<sup>202)</sup>。4 期生の会誌は『楊柳』である。「三十四 (1959) 年五月二日に第一号を発行して以来、四十七 (1973) 年の第二号以降は毎年発行されて昨五十八 (1983) 年十月に第十四号が出された。三喜会誌と違って同一誌名が墨守されている」<sup>203)</sup>。新 3 期の会誌は 4 期より一年早く、「三十三 (1958) 年一月に新三期の会誌『慢々的』第一号が発行されたが、三十四 (1959) 年一月の第二号以降は数年のブランクを置いて五十、五十一、五十二年に第三、四、五号が出された後、『元期会会報』と改められて第一号が五十六年十月に発行され、五十九年一月発行の第三号が最新号である」<sup>204)</sup>。7 期、8 期同窓生の合同会誌は『八旗』である。「『八旗』は五十三 (1978) 年十月に第一号が発行されて以来、毎年十一月に発行され五十八年の第六号が最新号である。期別呼称改訂前の

---

201) 阿蘇谷博「終戦直後の混乱まざまざ——同窓会活動 30 年の歩み」、建国大学同窓会編、『建国大学同窓会報』第 28 号、昭和 59 年 4 月 11 日、2-4 頁。

202) 阿蘇谷博「終戦直後の混乱まざまざ——同窓会活動 30 年の歩み」、(建国大学同窓会編『建国大学同窓会報』第 28 号、昭和 59 年 4 月 11 日、5 頁。

203) 前掲と同じ。

204) 阿蘇谷博「終戦直後の混乱まざまざ——同窓会活動 30 年の歩み」、(建国大学同窓会編、『建国大学同窓会報』第 28 号、昭和 59 年 4 月 11 日、6 頁。

八期に因んで命名された誌名を復古にするに忍ばず、折良く五号からは七、八（旧九）期合同会報として由緒ある誌名を見事に残された手腕に対しては脱帽せざるを得ない<sup>205)</sup>。6期の会誌は各期のなかで一番遅れていた。「最後に六期は『曙きざす』という名称の文集を五十六（1981）年二月十一日の同期会の日に発行している」<sup>206)</sup>。

そのほか、建国大学同窓会によりいくつかの私家版資料が刊行された。1966から1971年の5年間に、建国大学同窓会により『建国大学史資料』と題する私家版資料が出版された。その後、建国大学の2期生である湯地万蔵が、『建国大学史資料』を利用し、建国大学における出来事を年表の形で記録して『建国大学年表』を編纂した。『建国大学年表』では、重要な人物の講演、同時期文献、学生日記、インタビューおよび回想文などが収録されており、貴重である。その経緯は次のようであった。「五十年六月五日に二期湯地万蔵三編纂になる『建国大学年表』が建国大学史資料第六号として発行されたのを最後に第七号以下は日の目を見ていない。然しながら、この第六号が叩き台となって五十六年十一月三十日発刊の五百七十頁にのぼる箱入り『建国大学年表』という豪華版として実を結ぶに至るのである」<sup>207)</sup>。その他、『歓喜嶺（上）（下）』という建国大学同窓生回想文集も同窓会により刊行された。

建国大学同窓会会報および会誌では、様式と内容を共有する傾向がある。まず、毎期の最初では必ず会長の挨拶があり、同窓会総会の開催計画と定期的な会費出納などの情報が示されている。さらに固定的な欄目では、「近況説明」、「○○支部・海外便り」、「名簿更新」などがある。同窓会総会と地方、または海外の同窓との頻繁な連絡と同窓間の親睦の様子を考察できる。特に日中国交回復後、建国大学同窓会と中国側の同窓生との連絡が容易になり、中国側からの寄稿などもしばしば同窓会刊行物に発表されている。一方、亡くなった同窓・恩師に対する弔意表明・思い出などの内容もしばしば掲載さ

---

205) 前掲と同じ。

206) 前掲と同じ。

207) 前掲と同じ。

れている。以上に述べた内容は、満洲日系高等教育機関の戦後同窓会刊行物ではよく見られ内容である。

建国大学同窓会では、同窓間の連絡のために数回名簿を作成した。第 28 号会報の中で、阿蘇谷博は建国大学同窓会名簿の作成経緯について回想している。彼が最初に入手した同窓名簿の性格を有する印刷物は『建国大学情報第一報』というもので、記録された名簿の収録日付は 1946 年 7 月 14 日である。彼は次のように述べている。「わら半紙 B4 版二枚のガリ版刷り文書と同じく一枚の付属同窓名簿とから成るまことに粗末な印刷物ではあるまいか」<sup>208)</sup>。そのいわゆる第 1 版の同窓名簿が、1970 年の第 17 号の三喜会会誌『高やぐら』に収録された。第 2 版の建国大学同窓名簿は 1948 年 3 月 29 日に刊行された。その第 2 版の名簿に対して、阿蘇谷は次のように記している。「歎喜嶺会連絡所（東京都新宿区四谷三丁目九番地新進堂内）から発行された『御連絡事項と人名録』である。内地大学転入学の件や東京における学生生活等について連絡文書一枚と B5 版十二頁及びぶ全国の名簿とからなっているが、同様に当時の世相を如実に反映しているまことに粗末な仙花紙が使用されている」<sup>209)</sup>。

さらに、建国大学における京都大学の学閥意識は戦後同窓会活動にも及んだようである。一部の同窓は戦後関西の高等教育機関に所属し、その後関西で活躍した。建国大学の同窓会会報には、しばしば「関西支部便り」「福岡支部便り」などの内容が見られた。支部間の連絡と交流も会報など同窓会刊行物に掲載されていた。

## 第二節 建国大学同窓会と国際交流

### 第一項 戦後建国大学同窓会の日本国内活動

終戦後、満洲国の崩壊のため、建国大学は閉学という終焉を迎えた。閉学とともに、在学した日本人学生は日本に引き揚げ、日本国内で教育研究を続

---

208) 前掲と同じ。

209) 前掲と同じ。

けた。それらの手配は日本における様々な同窓会団体により、1948年まで行われていた。その時、日本全土における同窓会組織には、建国大学の同窓会だけではなく、多くの学校の同窓会組織があったが、それらの活動は首都圏に集中していた。建国大学の同窓会総会の「発足会」は1953年1月16日に東京の虎ノ門共済会館で開催され、80余名の同窓生や教職員が出席した。正式な第1回総会は、1954年5月2日に開催され、その時は、建国大学の開学（1938年5月2日）を記念する意味で、5月2日の日付を選択した。そのころ海外同窓との連絡はまだ取れず、同窓会総会には日本同窓のみが参加した。その後、国交回復と同窓会の活性化とともに、会報、名簿など刊行物も増えてきた。日本人同窓との交流もあって、海外同窓会（韓国・台湾）も次第に発展した。

終戦後1950年代の建国大学同窓会は日本国内のみで活動していた。作田荘一副総長の出身校が京都大学であったため、同窓会総会の開催場所もしばしば関西で行われた。最初の20回の同窓会総会の開催場所を見ると、第15回（1968年5月12日）は京都大学楽友会館で行われ、参加者人数も70-80名程度であった。第22回（1975年6月7日）は京都平安神宮会館で行われ、参加者人数は以前と比べると比較的多く、121名にのぼった。その後、同窓会総会はしばしば東京以外の場所で行われ、基本的には関西地域に集中していた<sup>210)</sup>。さらに、同窓会総会が関西地方で開催された時の人数は東京地区で行われる時より多かった。同窓会総会の準備および開催は各期順番で担当することになった。

さらに、建国大学の同窓会幹部は、満洲関連同窓会の中心的組織である国際善隣協会で重要な役割が任された。彼らは国際善隣協会の業務を利用し、建国大学同窓会の発展にも貢献した。「二水会<sup>211)</sup>」の会場は、発足当初は、

210) 第15回、京都大学楽友会館。第22回、京都平安神宮会館。第25回、大津ボウル。第30回、大阪グランドホテル。第35回、奈良ホテル。第38回、舞子ビラ（神戸）。第40回、福新楼（福岡）。第41回、東洋ホテル（大阪）。第48回、ホテル・モントレ大阪など。

211) 建国大学同窓会の活動の一つである。毎月の第二の水曜日に座談会の形で運営されていた。

帝国ホテル内の日本記者クラブで開いていたが、昭和五十一年（1966）七月と八月は日比谷のプレスセンターで行い、同年九月からは国際善隣協会の会議室に移り、以来今日まで、三十年の長い間、国際善隣協会のお世話になってきた。しかも、この会合が順調に続いているのは、善隣協会に勤務した同窓生たちが献身的な協力をしたお陰である」<sup>212)</sup>。

## 第二項 建国大学同窓会の海外活動

建国大学中国人同窓生との連絡は、日中の国交回復後にとりわけ盛んとなった。終戦直後の交流活動は、個人的記憶の形で行われたが、史料価値ある参考文献は残されていない。

1955年、1957年には建国大学中国人同窓生である陳抗<sup>213)</sup>（当時中華人民共和国外交部亜洲司に勤める）が日本を訪問した。その後、孫平化が1964年にLT貿易連絡事務所秘書長として訪日し、一連の交流親睦活動を行なった。孫平化は日中国交回復後、初代札幌総領事として建国大学の日本人同窓生と交流し、日中友好にも継続して活躍した。中国では、元建国大学の跡地を利用し、長春大学を建設した。当時の中国国務院総理李鵬の題言であった。

日中国交回復後、中国同窓も日本同窓会との連絡を始めた。日本同窓は熱心に訪中活動を展開し、日本同窓会は数回「歓喜嶺訪中団」の名で訪中活動を行なった。その一連の訪中活動はすべて建国大学の同窓会誌に報告された。1981年の第17号同窓会報では、前書きの部分から第5回「歓喜嶺訪中団」の記事を載せた。一方、中国側の同窓も出張、留学などでしばしば訪日した。そうした機会に中国側の同窓も日本同窓会で挨拶し、日本同窓会の会誌に寄稿した。

---

212) 日本建国大学同窓会編（国際善隣協会気付）『建国大学同窓会、日本であゆみ』、2007年、11頁。

213) 外交官。日中友好協会副会長。遼寧省出身。旧満洲建国大学、中国人民大学外交系卒業。中国政府の知日派として活躍。1972年9月の日中国交回復とともに外務省日本課長に就任。以後、在日大使館参事官、1980年札幌総領事、1982年マレーシア大使などを歴任。1989年8月から日中友好協会副会長を務めた。『中国人名事典——古代から現代まで』、日外アソシエーツ、1993年、444頁。



建国大学の戦後同窓会におけるネットワークは親世代のみならず、第二世代にも伝承された。建国大学の日本同窓会は、中国人同窓の子女の留学・事業に大きな役割を担った。例えば、同窓会として数多くの同窓生の子女の留学の世話をし、ビザの取得、保証人、あるいは一人当たり10万円の補助、アルバイト、就職の斡旋など各方面で貢献した。建国大学日本人同窓の海外交流について、建国大学5期である佐藤達也<sup>214)</sup>は次のように述べている。

「現在私は陳抗の息子陳燕生とコンピューターソフトの会社を、同窓3名とともに経営していたが、同窓の縁は子々孫々まで続いていきたいものである。私個人として上海在住の同期生、喬世隆の息子、海光夫婦の留学の保証、大連の8期の林承棟の三女の林青の留学の保証、および同期の李孟競の娘の保証等を行なった。〔中略〕また台北では吳憲藏、劉英洲、ソウルでは鄭聖朝と親しく交流を深めた。〔中略〕吳憲藏は台北の名士であり、台湾プラスチック、国泰百貨店、ホテル、銀行、保険、リース等の経営をしていた。満系4期の裴定遠が国府軍に走った兄（黄埔軍官学校卒）の行方が分からず、私に探して欲しいと依頼があった時、吳憲藏が直ちに発見、双方に大いに感謝されたことがある。ちなみに兄上は台北市の司令官になった」<sup>215)</sup>。  
(以下次号)

(かん・みい=本学民俗学研究所研究員)

---

214) 佐藤達也は建国大学5期生であり、終戦後中途退学となって愛知大学に入学し、その後三和銀行へ入社し、その後日中貿易関係の会社で勤務した。

215) 佐藤達也「建国大学と私」、愛知大学東亜同文書院大学記念センター『オープン・リサーチ・センター年報』第5号、57頁。

